

日本生物學會誌

— 22 号



日本生物學會

1986年 6月30日

阪上正信教授への手紙

—— チェルノブイリ原発事故に関連して ——

奥野良之助

4年前、阪上先生が通産省の出した意見広告に登場されたとき、私は「日本生物学会誌」上で少し批判させていただきました（14号、1982年10月）。「阪上教授の“反論”を期待します」とその最後のところに書いておいたのですが、遂に今にいたるまで、反論していただけませんでした。わずかに、理学部のいろいろな会合で、「日本生物学会なるものは、教授を不名誉会員にするなど、ふざけた学会だ」というようなことを言われてまわられているという、うわさが聞えてきただけです。でも、私の批判を少しでも気にしてもらえればいいと、私は思っていました。

チェルノブイリ原子力発電所が爆発して間もなく、北国新聞（1986年5月1日朝刊）紙上に、「ソ連原発事故の教訓」と題する阪上教授の「談話」が載りました。今度こそ、放射能に関する専門家として、原発の危険性を警告されているのではないかと思った私の期待は、またしても裏切られてしまいました。前にも書きましたが、私は放射能に関しては全くの素人です。それでも、阪上教授の談話には、どうもおかしいというところが、いくつも見受けられます。

そこで、もう一度この談話を批判したいと思います。「私はしゃべっただけで、記者が勝手に書いたのだ」などと責任回避はなさないで下さい。一般市民はこの文章を、すべて阪上教授の発言として受け取っているのですから。

「チェルノブイリ原発事故は発生以来数日たっても、まだ被害の状況さえはっきりしない。三年前の夏、日本学術振興会の二国間学術交流で訪ソし、ソ連の放射能化学研究者と交流があるだけに、今回の事故は特に関心があり、全容の解明が待たれる。今のところ、日本や石川県に何らかの影響があるとしても、地上での事故である点から、気流を考えに入れても原水爆実験などよりはるかに小さいと思っている。しかし、1961年から62年にかけて行った米ソの核実験の影響が、金沢市内の地下水に通常の2、3倍というトリチウム濃度で現在も現われていることや今回の事故の特異さを考えると、常時監視の体制は崩せない。」

ついでに、5月8日付の北陸中日新聞に出た、「神経質になるのは考えもの-専門家の意見」という記事の中の、阪上教授の「談話」も引用しておきます。

「放射能レベルが少しでも低い方がいいというのは大原則。だから雨水を飲用にするには念のためろ過したり野菜類を十分洗って食べた方がいい、ということになるがヨウ素131は半減期が8日と短し、降ったばかりの雨水をじかに毎日飲み続けるということは普通ではありえないこと。仮りにそうしたとしても今の値では許容線量以下。ウチにも電話がかかってきますが、心配しすぎですよ。」

阪上教授は原水爆実験に反対されていると思います。そしてその理由の1つは、先生の専門である環境放射能の蓄積ということでしょうね。だからこそ「常時監視体制」をつくって、数年前の原水爆実験のトリチウムを追っておられるのでしょう。その、自ら反対している原水爆実験と比較して、「大したことはない」（と庶民は受け取ります）というのは、いったいいかなる“論理”なのですか？ 前の通産省の意見広告では、原発運転中に出る放射能は自然放射能よりずっと低いから心配ない、と言われました。私は、たとえ少なくとも有害な放射能を増やすのだから、やはりいけないのではないかと批判しました。この点は、北陸中日の記事で先生自身が認めておられますね。ところが、また許容量をもち出して「心配ない」と結論されています。許容量や自然放射能やまして原水爆実験と比較して、「心配ない」と言う無責任な態度は、そろそろ改めてほしいと思います。

「談話」は次に、ソ連の原発の型式の問題にはいります。

「ソ連は1954年に世界で初めて原子力発電の実用化に成功した。1号機は5メガワットの小さなものだった。それ以後、独自にさまざまなアイデアを取り入れ、最近の資料では商業炉だけで46基を建設した。加圧水型、沸騰水型が多い他の国々に比べ、半数以上の26基が今回事故を起こした“黒鉛減速軽水冷却型”という点が特徴的で、レニングラード近郊にも同型炉が4基ある。この型の原子炉は効率は良いのだが、冷却装置に故障が起きやすい欠点がある。報道によると、事故があったのは4号機であり、82年以降に建設されたものらしく、独自に開発した方法に欠陥があったとも考えられる。もしこれが当たっているとすれば、粗削りでも大物をねらい、布石は実にうまいが、寄せがまずいソ連人の性格がそのまま表れたともいえる。」

ここにはさすがに、「ソ連の原発は型式がちがう。あんな事故は日本で起こるはずはない」といった、何とも単純な短絡思考はありません。ただし、もっとこみ入って複雑に同じ事を言っておられると、私には思われます。

まず、今回事故を起こした「黒鉛減速軽水冷却型」原子炉は、ソ連が独自に開発した方式であり、「効率は良いのだが、冷却装置に故障が起きやすい欠点がある」というところです。私にはわかりませんが、これはすべて事実なのでしょう。ところが、これは日本や欧米に多い「加圧水型、沸騰水型」に比べての話であり、読者は「日本の原発は効率を犠牲にしてまで安全性を追求しているのだな」と受け取ります。そう受け取るのは読者の勝手だ、と言われるかも知れません。でも、そう受け取ってほしくないのなら、少なくとも日本の原発の長所と欠点をここで述べるべきでしょう。これでは先ほどの、電力会社、科学技術庁、御用学者の短絡思考と同じになってしまいます。それとも、日本の原発は絶対に事故を起こさない完璧なものなのでしょうか。それならそう述べるべきです。私は信用しませんが、

「事故があった4号機」は「82年以降に建設されたもの」で、ソ連「独自に開発した方法に欠陥があった」のではないかと、いうところは、やはりソ連の科学技術だけに責任を転嫁するとともに、東海村1号機のことを考えておられたのではないですか。「黒鉛型」すべてが欠陥原子炉だ、ということになれば、日本唯一の「黒鉛型」である東海村1号機を停めなければならなくなりますからね。

この節の終りでは、とうとう事故の原因をソ連人の国民性にまで持って行ってしまいます。この筆法でいけば、日本人は「寄せはうまいが布石はまずい」ということになりそうですね。いったん出来た原発の運転は器用にやる。しかし、この狭い国土に世界一集中して原発を建てている。「布石のまずさ」のツケは、そのうちやってくると私は思いますが、阪上教授はどう予想されますか。ツケが回るころにはもうこの世にいないから、かまわないというわけですか？

ところで、事故原因を国民性にもっていくとどうなるか、少し考えてみましょう。世界の国の中で、それぞれの国民性によって、原発を建ててもいい国と建ててはいけない国ができるわけですね。阪上教授の口ぶりでは、日本は良くてソ連はいけない、ということのようです。こっちは建てるが、お前のところは“国民性”が原発向きではないから建てるな、などと言えとお考えなのでしょうか。といて、そんな危い国に建てさせるわけにもいきません。放射能は国境があることなど知りませんから、どんどん飛んできます。この論理でいけば、日本でも止めるからソ連でも止めてくれ、という以外に道はありません。それでいいのでしょうか？

次は、國家の体制と原発の関連性です。

「原子力発電は極めて社会主義に向いた施設であるといえる。ソ連が早くから原子力発電に力を入れたのはその点を重視してのことである。國の建設方針に反対がなく、放射性物質を扱うため、安全管理面に社会主義的な統制を必要とするからである。」

現代の世界の二大社会体制といえ、欧米と日本をはじめとする資本主義体制と、ソ連・中

国を筆頭とする社会主義体制ですね。それを前提にして「極めて社会主義に向けた施設である」と言い切られたことは、「(極めて)資本主義には向かない施設である」という意味を含むと思いますが、そう受け取ってよろしいでしょうか。もしそうではなく、資本主義にも向いた施設であれば、これは全く無意味な発言になってしまいます。

私は、原子力発電は社会体制のいかんを問わず、人間社会そのものにとって危険な「向かない」施設だと思っています。だから、どちらの体制に向いているかなどという問い自体が無意味だと思うのですが、しいていうとすると、私もやはり社会主義体制の方がまだましだとは思いますが、それは、利潤を目的にしている資本主義社会では、そのために経費を切りつめ安全性を犠牲にすることが、大手を振ってまかり通っているからです。わずかな処理費を惜しんで排棄物をたれ流したばかりに巨大な被害を生じた、水また病をはじめとする公害の記憶はまだ生々しいし、いまでも解決していません。原発でも、少し稼働率が上ると定期点検をゆるめようなどと、監督官庁自らが言い出すのが、資本主義体制ですから。もっとも、ソ連や中国も最近、利潤導入などと言い始めていますから、社会主義体制も信用できなくなって来ましたが。

もっとも、阪上教授の真意は、そうではなさそうですね。「国の建設方針に反対がない」、「安全管理面に社会主義的統制を必要とする」要するに、建設・管理の両面とも、国民の反対がないから「つくりやすい」ということなのでしょう。このことは、最後にもう一度問題にしたいと思います。

次は、「軍事用」の秘密性の問題です。

「ソ連にとっては誠に都合の良い施設も軍事優先が落とし穴になっているようだ。私たちは学術的にソ連の原子力発電所の資料を入手できる立場にある。ところが、軍事用についてはまったくのヤミの中である。研究者の中には私たちとの交流を望んでいるものもいるが、こと軍事となると、国の立場が優先する。資料ではソ連でも原子力の安全管理組織は一応ある。しかし、構造やメンバーの訓練度となると皆目見当がつかない。今回の事故をソ連政府は積極的に公表し、ソ連の科学者も良心を見せてほしい。放射能は一國の力で制御できるものではなく、国際協力が必要だ。」

原子力発電が「軍事利用」と関係があり、それがネックとなってすべてが公開されない。それが今回の事故の大きな原因だ。というわけですね。でも、それは何もソ連に限ったことではないと思いますが、どうですか。アメリカの原子力潜水艦や原子力空母の原子炉はすべて公開されているのでしょうか。原爆用のプルトニウム生産の実態は何もかもご存知でしょうか。欧米の科学者でも、その多くは「こと軍事となると、国の立場が優先する」にちがいないでしょう。どこの国でも、「軍事優先が落とし穴」になっているはずで、阪上教授は前の通産省の「広告」の中で、「原子力が爆弾から開発されたということは確かに不幸なこと」だ、しかし「平和利用で

ありさえすれば、原子力発電のようにエネルギー問題解決への大きな糸口となり、ひいては人類の文化発展のためのかけがえのない存在にも」と、「軍事」は否定されましたが「平和利用」は賛美されています。二つを分けて考えられたのは、間違いだったのです。少なくとも、「軍事利用」が存在する限り、「平和利用」すなわち原発も、やはり危険なのです。

日本には軍事利用はない、と言われるかも知れませんが、もしそうだったとしても、「放射能は一国の力で制御できるものではなく、国際協力が必要」なので、日本でもつくってはいけないことになります。阪上教授の考えにしたがうと、最底次のようになります。「軍事利用がからむとどうしても危険を生じる。また、原発は一国では管理できない。したがって、世界中から核兵器が全廃されるまで、原子力発電所は凍結すべきである。」私は、核兵器はもちろんですが、原発も廃止せよという意見です。上のは阪上教授御自身の論理的な結論です。自身の論理にしたがって、利益にまどわされることなく発言するのが、「科学者」たるものの最底のモラルだと思いますが、なぜ先生は、「原子力発電の凍結」を主張されないのですか。「ソ連の科学者」の「良心」を求めるのも結構ですが、その前に阪上教授御自身の「良心」、それで良いのでしょうか。

この「談話」は、反対運動を高く“評価”する奇妙な論理でしめくられます。

「今回の事故は日本の原子力発電所に短期的には反対運動の高まりなどさまざまな影響が出るだろう。しかし、原子力の安全利用には適度の緊張関係が必要なことは今回の事故が証明している。すべてがオープンであり、反対することも自由な日本ではこの種の事故が起きる要素は少ないと思われるし、それを期待したい。」

阪上教授は遂に、原発事故防止の決め手は、「反対運動」であるという認識に立たれました。国家統制のきびしいソ連には反対運動がなく「緊張」がゆるんで事故が起きた、というわけです。前に言われた「社会主義に向いた施設」というのは、やはり、反対がなく、つくりやすくて運転しやすいという意味だったのです。日本の原発は、反対運動あるかぎり安全である、というのが阪上教授の結論のようです。でも、もしそうなら、反対派住民がくたびれ果てて運動しなくなった時こそ、日本の原発は危機的状況をむかえるわけですね。その時は、電力会社なり政府が金を出して、「反対運動」を盛り上げることになるのですか？

原発反対の運動をしている人たちは、原発をつくり動かしている人たちを、「適度」に「緊張」させるために、身銭を切って、出世をあきらめて、警察につかまる危険をおかして、運動しているわけではありません。原発はそれこそ人類全体を滅ぼしかねないほど危険だと思うからこそやっているのです。しかもその上、阪上教授は、「事故が起きる要素が少なく」としか言われていませんし、おまけに「それを期待したい」と他人事のように言われるだけです。反対派に責任を転嫁し、「ソ連の原子力発電所の資料さえ入手できる立場」におられる放射能の権威である

阪上教授は、「期待する」ですむのでしょうか？ 原発は安全であり、建てるべきだという立場に立つ専門家阪上教授こそ、反対者を納得させるに足るだけの資料をそろえて、原発の安全性を証明すべきではないのですか？ 期待するのは私たちの方なのです。すりかえてもらっては困ります。

阪上教授は、私などよりもずっと、原発の危険性をよくご存知だと思います。私は「ソ連の放射能化学研究者と交流」などしていませんし、放射能のことは大して知らないからです。なぜ本当のことを発表していただけないのですか？ だれかに口を封じられているのですか。

でも、次の2つの質問には、ぜひ答えていただきたいと思います。国民の税金で建てられ運営されている金沢大学低レベル放射能研究施設の長としての、それは義務であるはずですが。

1. 現状の世界、ソ連も日本もアメリカもすべて含めて、において、チェルノブイリ原発のような事故は二度と起こらないと、確信されていますか。反対運動に責任を転嫁するような不真面目な答でなく、本当の気持ちをお聞かせ下さい。
2. たとえば、福井の原発でチェルノブイリ級の事故が起こった場合、その被害はどこまで、どの程度のものになるのか、先生の学識と資料をすべて使って、具体的に説明して下さい。これは、私のみならず、北陸地方のすべての人が聞きたいだろうと思います。

すべてが「オープン」であるはずの日本です。答えられないことはないはずですが、「ソ連の学者の良心」を期待された阪上教授に、私たちはその“良心”を求めます。

人間生態学への招待 (1)

本郷支部長

「人間生態学」などという、本学会員のかんりの部分を占めると思われる生態学徒、<心配しなくとも、そんな学徒は数えるほどしかいないよ> もしくは元・生態学徒には、生態学の一分野を連想させるかもしれない。しかしながら、私がこれから書いていこうと考えているのは、一般に社会科学とよばれている領域に属することがらである。<“生物学”の一分野だね>

現在、文科系の大学院に所属する私は、はじめ生態学に興味をもって理科系の学部に入學した。結局は教養の数学と物理に落ちこぼれて<小生はその上化学もわからなくなった> 文転したのだが、<良かったね> いまでも生態学への関心は残っているらしく、生態学者の発言などを見つけると、しばし目をとめたりする。しかし、実のところ、私の関心ははじめから生態学とは別のところにあつたらしい。つまり、それは「人間生態学」だったのである。

私は生まれてからのしばらくと、高校時代の三年間とを金沢で過ごした。高校二年のころだったろうか。ふとしたことからホイッタカーの「生態学入門」なる本を手に入れた。私は、植物群落の構成の単純なモデルや、プランクトンの生存競争の数理モデルに強く関心をひかれた。当時の私は、これをもう少し複雑にしていけば人間社会のモデルが出来るに違いないと考えた。むしろ、そのために生態学をやろうと考えたのである。奇妙に思われるかもしれないが、私がマルクスに親しみはじめたのもちょうどこのころである。生態学——それもスマートな数理モデル——とマルクス。私にとってこの取り合せは自然なものであつた。私は何も正義感や人間愛からマルクスを受け入れたのではなかつた。私はマルクス主義を、人間の行動や社会変動に関するひとつの決定論的モデルと考えた。数理モデルが何らの個体差や偶発事態をも認めないように、当時の私にとってのマルクス主義は、人間——気に入らない教師や同級生、あるいはエライさんたち——の行動が、物質的な諸関係に決定された予見可能なものであり、崇高なところなどにひとつない下等なものであることを示す理論だったのである。<今でもそうやと思てるのやけど、違うんかいね>

かくして私は、金沢の書店で高校生の小遣いの範囲内の(せいせい千円どまりの)生態学

書を、古本屋でマルクスの文庫本（金沢の古本屋には、不思議とマルクス主義関係の本が多い）<不思議ではない。金沢人はマルクス主義がきらいだから、みんな古本屋に売ってしまうのである> を買いあさり、受験勉強の合間に読みふけた。バス代を節約するために、本屋までは歩いていくことが多かった。寺町の下宿から片町まで、サイ川べりの道を何度となく往復した。この道はいまでも私のもっとも好きな場所のひとつである。

大学に入り、難解な数学と物理の授業にいや気がさした私は、ほとんど授業には出なくなり、社会科学や哲学の本を読みあさるようになった。私の関心も大きく変化していった。そのなかで私はとくに初期マルクスのヒューマンズムにひかれるようになった。またある時は過去の労働運動や学生運動の記録に胸を躍らせた。運動にかかわっている友人も何人か持った。数理モデルには完全に興味を失ない、文科系の学部に進学した。このあたりはいろいろと書くこともあるのだが、後のためにとっておこう。

大学院に進学してから、私はもういちど数理モデルをやりはじめた。これにはいくつか理由がある。今日、社会科学の世界にも技術革新の波がおしよせてきている。何か言おうとすると、データの分析結果が必要となる。統計学にかんする知識は社会学者の一種の基礎的素養となりつつある。この世界でメシを食べていくために必要になってきているのだ。もっとも、きらいならばやらなくてもなんとかやっていけないことはない。実際、統計などは一切使わないでひたすら観念の世界にとじこもっている学者は多い。（ただし使わないからにはその理由をはっきり述べることができなくてはならない。学問の世界でのことだから、「だってきらいなんだもの」では済まされないのである。<「だってわからないんだもの」でもダメかね。年寄りおおかたクビにせんならんね>）この後者の道を選ぶ者は若い世代にも多い。私がそうしなかったのは、やはり高校時代の考えが棄てきれなかったからでもあろう。<いや、算術ができたからであろう。— ひがんでいる劣等生>

こうして私はもういちど「人間生態学」をやりはじめることになった。ただし、高校時代と異なるのは、それを何らかのかたちで人びとのために、とくにこの世でしいたげられている人々のために役立てたいと考えていることである（ついに言ってしまった！ ハズカシー）。<何もハズカシがることはない。おそらく役には立たないから>

イギリスなどでは多数の実証研究者たちが貧困の問題に取り組み、データを収集し、多くの成果を挙げ、社会的にも大きな影響をあたえてきている。たとえば次の表を見ていただきたい。（次ページ）

何と、最も貧困な層——非熟練労働者（建設業、鉱業などに多い）の死亡率は、専門職（医師・弁護士・学者・会長など<“会長”は余計やろ>）の2.5倍にもなるのである。イギリスという国には、この種の統計データが実によくそろっている。中には持ち家・借家別死亡率なんてのさえある（格差は1.3倍）。資本主義的な競争を賛美するサッチャーなどのよ

表1 社会階級別死亡率
(1971年・イングランドとウェールズ・人口千人あたり)

社会階級	男	女
I 専門職	3.98	2.15
II 中間層	5.54	2.85
IIIN 熟練ホワイトカラー	5.80	2.76
IIIM 熟練ブルーカラー	6.08	3.41
IV 半熟練労働者	7.96	4.27
V 非熟練労働者	9.88	5.31
V/Iの比率	2.5	2.5

(P. Townsend ほか "Black Report" より)

うな人でも、さすがにこのような較差を肯定することはできまい。このような事実が明らかとなっている以上、いかにサッチャーといえども福祉政策の根幹にまで手をつけることはできないのである。(もっとも彼女は、そのかわりに反抗の中心である労働組合つぶしに精を出しているのであるが。<その手をしぼる“統計数値”はないのかね>)

これにひきかえ日本にはこの種の統計が非常に少ない。かろうじて職業別死亡率の統計が手に入るくらいである(統計のとり方が違うので正確な比較はできないが、格差はイギリスより大きい)。政府は自分に不利になるような統計を公表したげらない。学者のほうは政府や学会のボスににらまれるような研究をやりたげらない。良くて人畜無害、悪ければ御用学問に成り下がっているのである。

学問でメシを食う以上は、自分がメシを食うために政府の片棒をかついで人様に迷惑をかけたりはしたくない。本学会の会長のように文字通り人畜無害の研究に徹するという手もないではないが——先に言った理念の世界に閉じこもっている研究者たちは、この道を選んでいるのである<そうかねえ?>——できれば体制批判のための研究をやっていききたい。<申し訳ない—会長> そのためには諸種のデータを収集し、分析を加えていかねばならない。(もちろんこのデータというのは統計的なものに限られるわけではない。観察記録やインタビューなども含む) 私にとっての「人間生態学」とは、こういう作業のことなのである。

1 分 類

人間の生態を研究するためには、まず人間の分類が必要になろう。人間の社会は複雑な分化と変動をくりかえしているので、研究の目的によって、異なる分類規準が必要となる。主要な分類法としては、

- (1) 人種 (race) : 生物学的な特質に注目するもの
- (2) 民族 (folk or ethnic group) : 歴史的・文化的・言語的な統一性に注目するもの
- (3) 国民 (nation) : 政治体制の単位にもとづくもの
- (4) 職業 (occupation) : 労働における職務内容にもとづくもの
- (5) 階級 (class) : 生産手段 (生産に必要な設備や原料など) の所有関係や搾取の関係にもとづくもの

などが挙げられよう。このなかで社会学で主に用いられるのは、職業と階級である。

1.1 職業分類

この分類はもっともポピュラーなものといってよい。新聞の世論調査などでもよく使われ、職業別の自民党支持率なんていう集計結果が掲載されたりする。よく用いられる基本的なカテゴリは次のようなものである。

- A. 専門的・技術的職業
- B. 管理的職業
- C. 事務
- D. 販売
- E. 農林漁業
- F. 採掘業
- G. 運輸・通信
- H. 技能工・生産工程および労務作業
- I. 保安的職業
- J. サービス的職業

職業分類とまちがえやすいのは産業分類である。例の第一次産業、第二次産業、第三次産業という奴である。この両者の大きな違いは、職業分類が個人の職務内容を分類するものであるのに対して、産業分類が事業所の事業内容を分類するものであることである。たとえば、オフィスビルの集中する東京都千代田区丸の内には第一次産業従事者はいるが農林漁業作業者はいない。丸の内には漁業会社の本社があって、第一次産業従事者が事務作業などをやっているのである。

それでは、一人の人間が二つ以上の職業を持っていたらどうするか。各種の調査ではふつ

う、「主な職業」について尋ねることになっているから、たいていの場合は大丈夫である。ただし、どれが主であるかの判断は本人にまかされていることが多い。人間というものには普通見栄っ張りであるから、体裁のいいほうの職業を答えるであろう。したがって、統計では体裁のいい職業の方にバイアスがかかっている可能性がある。

今年が国勢調査の年だったので、たいていの人があの複雑な調査票に記入させられていやな思いをしたにちがいない。調査票では、勤務先や仕事の内容をそのまま書くことになっている。国勢調査の職業分類は小分類まで入れると285種類もあり、とても本人に判断させるわけにはいかないので、具体的に記入させてあとで分類することになっているのである。たとえば、仕事の種類に「学生をいたぶること」と書いてあっても、勤務先が「金沢大学理学部」となっていれば、調査者が勝手に判断して「自然科学系研究者」としてしまふ可能性が高い。<ボクのことじゃないよ 一会長>

ちなみに、国勢調査の集計結果は1人単位まで発表されて日本の人口が正確にわかったことになっているが、あれは真っ赤なウソである。次の表を見ていただきたい。

1950年生まれ男子の人口推移 (国勢調査による)

1965年(15才)	1,126,864人
1970年(20才)	1,084,586人
1975年(25才)	1,103,362人
1980年(30才)	1,102,659人

なんと、20才から25才にかけて人口が増大している。70-75年のあいだに、はたち過ぎの赤ん坊が2万人も生まれたというのか。そんなはずはない。(差引で2万人もの若者が海外から日本へ移住してきたとは考えられない) 親元を離れて間もない若者たちが、若気のいたりか、あるいは住所・職業不定のためか、はたまた国勢調査フンサイの革命的気概に燃えてかはわからないが、国勢調査に協力しなかったからである。ついでに言うと、1980年の国勢調査では、男の有配偶者が29,386,831人、女の有配偶者が29,472,446人いたことになっている。この原因としては次のようなものが考えられる。(1) 夫が外国へ単身赴任している、(2) 女同士で結婚している者がいる、(冗談で言っているのではない。国勢調査でいう有配偶とは、届出していなくても事実上婚姻関係にあればよいことになっているのだ) (3) 内縁関係にある男女で、女は結婚していると思っているが、男はそう思っていない、(4) 2号、3号、……、n号を持つ男がいる。

1.2 階級分類

一部の人たちには評判がわるいが、労働者階級とか資本家階級とかいうやつである。日本語でいうとやや気難しい感じがするが、英語でいうと class、ドイツ語でいうと Klasse である。何のことはない、どこの学校にもあるあのクラスと同じである。つまり、ごく簡単な日常用語なのである。社会科学上の用語として区別するために、social class とすることも多い。階級という概念はさまざまな意味で使われるが、やはりマルクスの用いた意味で使われることがいちばん多いし、また、それが正確な用法であろう。つまり階級とは、生産手段との関係の種類によって人びとを分類する概念なのである。

生産手段とは、生産のために必要な機械、建物、原料などをいう。われわれの社会には、生産手段をもっている人びとと、もっていない人びとがいる。もっていない人びとは、自分では生産活動をおこなうことができないので、生産手段をもっている人に自分を売りこんで働かせてもらわねばならない。その対価として賃金を受け取るわけである。彼らは他人のものを使わせてもらっているかっこうになっているので、生産手段を勝手に動かしたり処分したりすることができない。彼らは生産手段を運用するにあたって、すなわち労働過程において、他者から統制されざるもえないのである。彼らを労働者とよぶ。これにたいして、生産手段をもっていて、労働者を雇い、働かせるのが資本家である。このなかには、自分の財産として生産手段をもっているわけではないが、社長とか重役とかの地位にあるためにそれを自由にうごかすことができ（これは実際の役割からいえばもっているのとおなじことである）、やはり労働者を雇ったり働かせたりする人びともふくむ。彼らは、資本主義社会における支配的な階級である。労働者と資本家は資本主義社会の二大階級である。労働者のことをプロレタリアート、資本家のことをブルジョワジーと呼ぶこともある。

しかし、資本主義社会にはこのほかに、いくつかの階級あるいは階級と階級のあいだの中間形態がある。代表的なのは、旧中間階級と新中間層である。われわれの社会には、生産手段をもっているけれど、他人を雇っていなかったり、雇っていてもごく少数であるようなひとびとがいる。代表的なのは自営業者や農民である。これは労働者や資本家とは別の階級であるとかんがえられる。彼らを旧中間階級とよぶ。“旧”というのはもちろん、古いという意味である。このようなひとびとは労働者や資本家が出現する以前から、つまり、資本主義社会が成立する以前から存在していたからである。新中間層は、おなじ“中間”でもこれとは全く異なるひとびとである。かれらを“中間”と呼ぶのは、かれらが資本家と労働者の中間に位置しているからである。その代表は中間管理職である。かれらは、生産手段をもっていないのに、本来資本家の仕事である労働者の統制の一部を資本家からまかせられている。上からは命令され下にたいしては命令する。つらい立場ともいえるが、それなりに甘い汁も吸っている。<てな

とだれもならないもんね> もうひとつ、組織で働く専門職者がいる。かれら――病院の医者や学校教師などは、生産手段をもっておらず、人に雇われているにもかかわらず、仕事の内容が専門的であるために、労働過程を人からきびしく統制されることがない。けっこう自由に仕事ができるのである。<日本生物学会を文部省“後援”にしたりしてね> かれらは中間管理職とはだいぶ違うけれども（かれらは、資本家と労働者の中間というよりは、自営業者と労働者の中間なのである）、資本主義社会の発展の中で、新しく出現した人びとなので、やはり新中間層のなかに含めることにする。もうひとつ、むずかしいグループがいる。零細企業主である。かれらは、たとえば5人とか10人とかの労働者を雇っていて、かれらの労働を統制しているので資本家といえそうな気もするが、大企業の下請けとして苦しめられていたり、経営難であえいでいたりするので、資本家にしてしまうのはかわいそうでもある。<厳正な“科学”に“かわいそう”などという概念をもちこんではいけない> かれらは、資本家と自営業者の中間に位置するとかんがえられる。

以上の階級や、それらの中間形態をまとめると、次の図のようにあらわすことができる。

資本主義的階級

前資本主義的階級

資本家階級

新中間層1（管理職）

旧中間層

新中間層2（専門職）

労働者階級

さて、それでは実際に人びとをいくつかの階級に分類するにはどうしたらよいだろうか。残念というか、当り前というか、総理府なんかの統計には階級別人口なんていう集計表はっていない。階級という分類法はもともと資本主義社会の不平等さや非人間性を明らかにするのに威力を発揮するものであるから、資本家の手先である総理府なんかを使うはずはないのである。したがって、日本社会の階級別人口をしらべるためには、自分で国勢調査のような調査をやるか、国勢調査の結果を加工しておおまかに各階級の人数を計算するしか方法がないことになる。国勢調査と同じ規模の調査なんかできるはずがない。（全人口の何万分の1かを抽出して調べるという方法もないではないが、それでも数百万から数千万の金がかかる）。だからここでは後者の方法をとることにする。このアイデアは、私のオリジナルではない。大橋隆憲という人がすでにやっている。くわしく知りたい人は岩波新書の「日本の階級構成」という本を読むといい。大橋氏は国勢調査のなかの職業と従業上の地位（経営者、被雇用者、自営業者…という分類）のクロス集計表の数字をいろいろと組み合わせて計算し、階級構成表を作成し

たのである。この計算はけっこう複雑で理解するにも計算するにも時間がかかる。大橋氏は1950年から1970年までの階級構成表を作成しているが、これはやってみると意外に大変である。さて、こうして階級ははじめて具体的な数であらわされるようになった。しかし、こうした作業は一度だれかがやってしまうと、まねをしてもあまり評価されないようになる。1975年や1980年の階級構成表などは国勢調査の抽出速報がでるとほとんど同時に何人かの人が作成してしまった。研究上の業績として評価されるためには人と違ったことをやらねばならないのである。そこでとんでもないことをする人が現われた。それはK大学（金茶話大学ではない）のI助教授である。国勢調査は都道府県別に集計表がでるから、やろうと思えば都道府県別の階級構成表がつくれることは前からわかっていた。ただし、全国の階級構成表の47倍の手間がかかるだけの話である。それをやってしまったのである。もちろん、I助教授が自分で計算したのではなからう。学生を使ったのである。じっさい、その報告書の序文には、この統計資料は学生諸君の労苦を惜しまぬ協力の結果である、感謝する、などと書いてある。この「業績」のおかげでI助教授は、階級について研究している人びとのみならず、都市問題や地方自治などを研究している人びとに有名になったのである。＜人民のために研究する人は有名になることも避けてはいけない＞

話をもとにもとそう。私は、現代の社会には資本家階級、労働者階級、新中間層、旧中間階級の4つの階級があるといった。ところが、大橋氏によると資本家階級、労働者階級、自営業層の3つの階級しかないことになっている。専門職や事務職を新中間層として区別せずに、労働者階級のなかに入れてしまっているからである。これでは困る、というのが私の考えである。専門職や事務職を無条件で労働者階級に入れるとどうなるか。大病院の高級取りの医者や、帝国大学の教授や、売れっ子のプロデューサー、大商社のエリート社員、今をときめく独裁会長＜これを言いたかったんやろ＞などが、工場労働者や鉄道労働者と同じになってしまう。これでは、現に存在する社会的不平等がおおいかくされてしまう。人類みな兄弟、エリートも労働者もあらしまへん、というのとまったく同じである。そこで私は、大橋氏のやり方に改良を加えて、次のように各階級を区分することにする。（次ページ）

あんまり変わらない、人のアイデアを盗んだけじゃないか、って？ 何とでも言え。これにはちゃんとした学問的理由とかいうものがあるのだ。

1980年における各階級の人数は次のとおりである。

資本家階級	270万人（4.7%）
新中間層	1327万人（23.3%）
労働者階級	2550万人（44.7%）
旧中間階級	1558万人（27.3%）
計	5705万人（100.0%）

	大橋方式	本郷支部長方式
1. 個人企業主 2. 会社役員と管理職員 3. 管理的公務員	資本家階級	資本家階級
4. 自営業者と家族従業員	自営業者層	旧中間階級
5. 専門的・技術的職業従事者 6. 事務従事者	労働者階級	新中間層
7. 農林漁業従事者（被雇用者） 8. 鉱工運輸通信従事者 9. 販売従事者 10. サービス職従事者 11. 完全失業者	労働者階級	労働者階級
12. 軍人・警官・保安サービス員	(別カテゴリー)	労働者階級

(2の管理職員、3、5-10、12は、被雇用者を分類したもの。1と4は従業上の地位分類である。なお、これらの方法では働いていない人は分類できない。)

なお、これからの話では、人間の分類には原則として階級分類を用いることにする。これは、もちろん私の好みもはいつているが、あとでわかるように社会科学的な有効性があるからである。

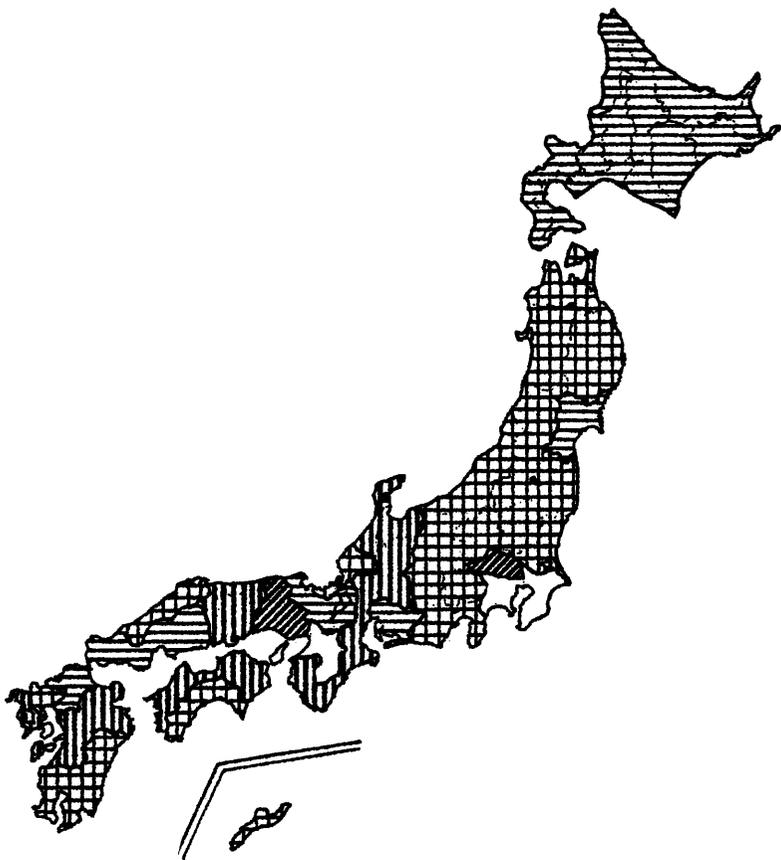
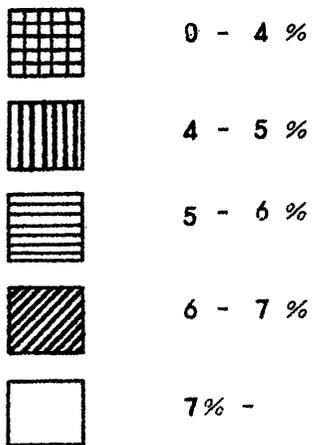
2. 分 布

最初はやはり生態学らしく分布の話からはじめることにしよう。先述の I助教授の「業績」をすこしばかり借用して日本における各階級の分布図を描いてみたのが、次の図である。それぞれ、各都道府県の全人口に占める割合によって色分けしてある。(次の2ページ)

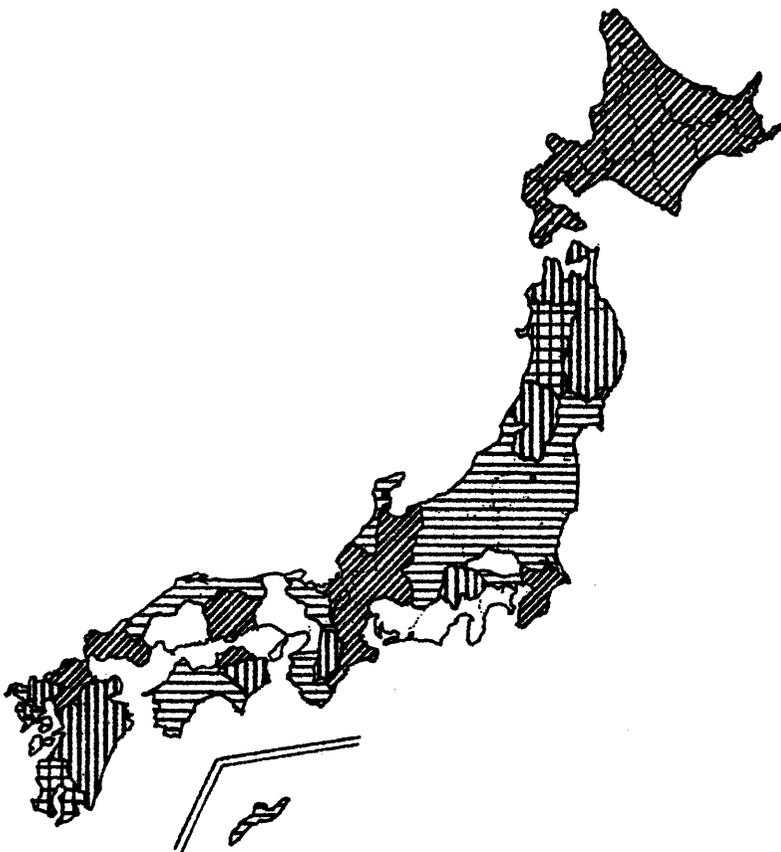
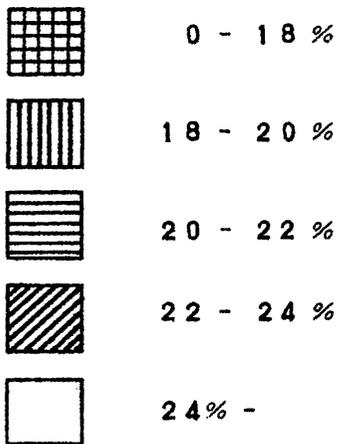
階級の分布図ができたところで今回はおしまいにすることにしよう。

そういえば今日の朝刊に前田家の屋敷の発掘の話が載っていた。私が支部長として統括している本郷は昔、前田家の屋敷のあったところである。屋敷はその後取り壊され、東京帝国大学が建てられた。それから百年、東京帝国大学は大企業に数多くの人材や知識技術を提供してきたので、大企業にここで少しお礼をしてもらって、一段とお仲良しになろうということになった。予定よりは少なかったけれど寄付金が集まったので、学生や労働者がいつも野球をしたり散歩をしたりしている運動場をつぶして、教授・助教授専用のキャバレーを作ろうということになった。学生は一切はいれないようにして、みんなで酒を飲んだりうまいものを食ったりすれば、ストレスも解消するし、ノーベル賞まちがいなし、というわけである。学生や一般人がみてうらやまし

資本家階級



新中間層



労働者階級



0 - 32 %



32 - 36 %



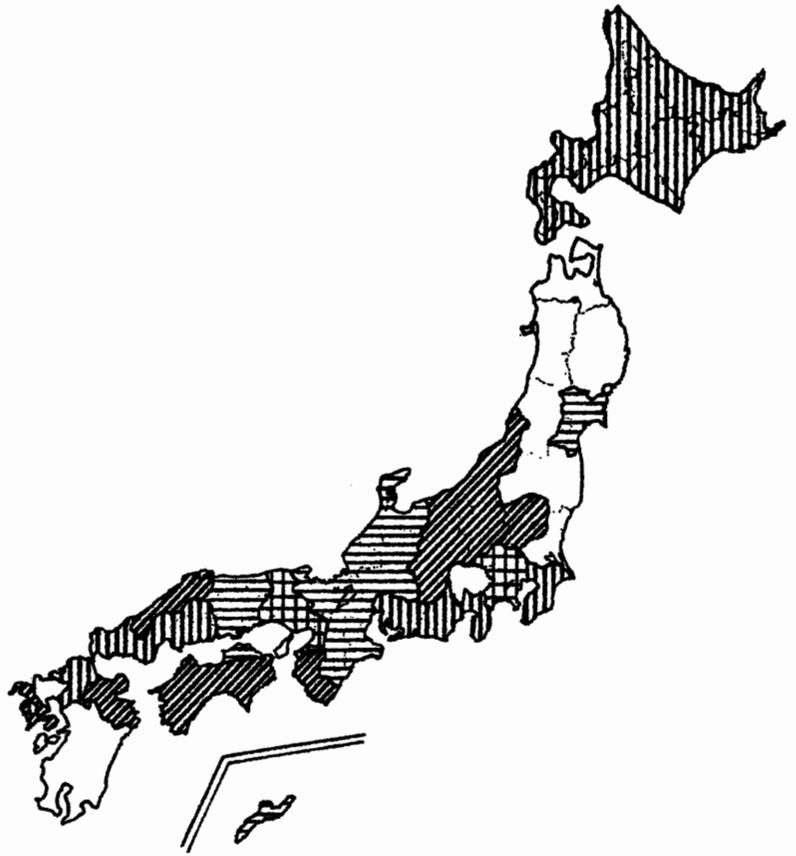
36 - 40 %



40 - 44 %



44% -



旧中間層



0 - 25 %



25 - 30 %



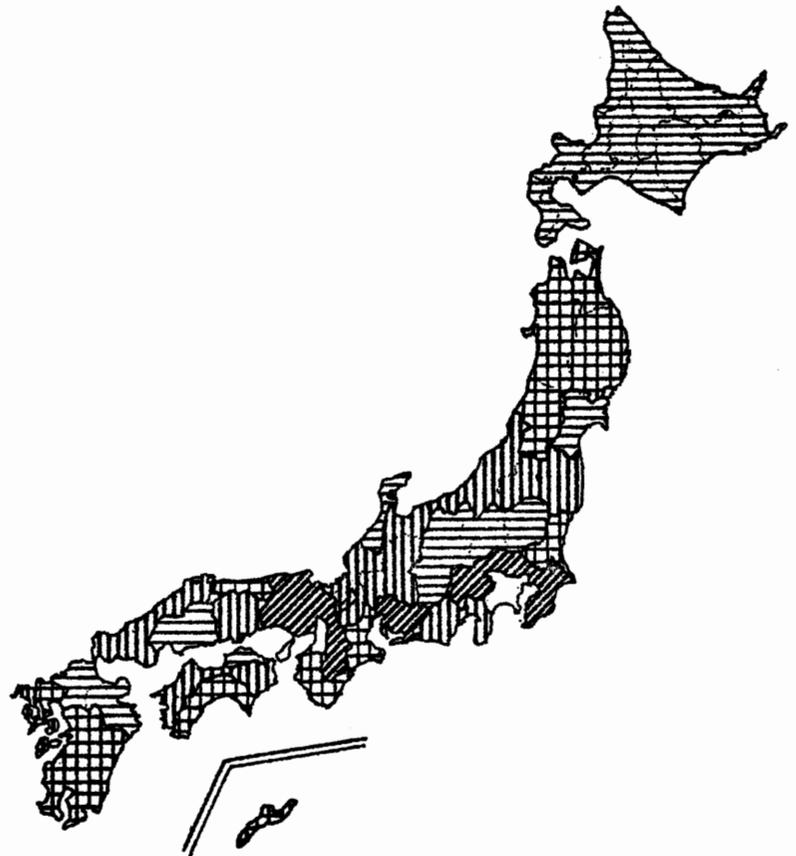
30 - 35 %



35 - 40 %



40% -



がるといけないので、運動場のまわりを鉄さくで囲って、工事が始まった。ところが、工事をしてみると、前田家の屋敷跡がでてきたのである。大学というのは学問をやる場所だということになっているから、いくらなんでもキャバレーをつくるために屋敷跡を破壊したというのでは体裁がわるい。教授たちはなんとかして事実をかくそうとしたのだがうまくいかず、本格的な発掘作業がはじまった。かくして、キャバレー開店は4、5年延期ということになり、教授たちはいま、たいへんくやしがっているところである。思えば、もとは加賀の貧しい農民たちを搾取してつくられた屋敷である。農民たちのおん念は時代を超え、東京帝国大学の教授たちの願望を打ち砕いたのである。このように、支配され、搾取された人びとのおん念や抵抗というものは、いつかは必ず実を結び、特権者たちを陥れるのである。というわけで、本郷はたいへんに金沢と関係がふかい。したがって、それを統括する本郷支部長は日本生物学会のなかでも特別の地位にあるといわねばならない。

いつになるかわからないが、次回に乞、御期待。＜早く書け。貧しき人民は待っておるゾ＞

体験的“周期性四肢マヒ”の研究

藤 田 茂

朝5時、尿意をもよおして目が覚める。フトンから脱け出そうとした私の全身に冷汗が走った。〈冷汗とは“走る”ものなのかね——会長〉体が動かないのだ。両手、両足も全く動かない。不動金しぼりの術に会ったかのように。訳の分からない恐怖とオシッコをもらしそうなあせりとてパニックに陥いる。しかも、ここは2階。便所は1階に下りなければならない。死にも狂いで体を動かそうとするが呼吸が苦しくなるばかりで、寝返りさえ打てない。1分、2分、3分。のたうつようにして何とかフトンから脱け出る。ほうようにして廊下へ。筋肉が無力になっていて、たちまちその場へベシッとつぶれる。それでも必死にはう。階段を後ろ向きに1段づつはい下りる。息が苦しい。油汗がベツリとにじむ。〈油汗はさすがに走らんようだね〉数段下りたところでガクッと力が抜けて、ゴロゴロッ、ドスンと階下まで転落する。腰をしたたかに打った痛みと、股間をぬらしていくオシッコの温さの中、物音に人々が起きて来る。1972年1月、当時、住み込みで働いていた千葉の寿司屋で、私はこの世にも恐しい周期性四肢マヒ症になったのであった。

すでに前兆は2、3か月前からあって、夜とか明け方、ベッドへの上り下りの際、手足に力が入らないことを何度か経験していた。しかし、完全に四肢がマヒしてしまったのは初めてである。ケガをして動かさないというのなら分かる。ところが、前の晩何もなくて、目覚めと同時に自分の体が全く動かないのに気づくというのは、恐怖である。しかも、この症状はせいぜい2時間位で、あたかも氷が凍けるかのように、あるいは吸血鬼が朝日の昇るとともに休むごとく、2時間後には何もなかったように手足が動かせるのだ。

この周期性四肢マヒ症は、18世紀フランスで発見されたそうで、糖分のとりすぎにより、神経をつかさどる血液中のカリウムの成分が低下して起こるとか。当時の私は異常に甘いものが好きで、給料日にショートケーキを7コ位買ってきて、独りでニンマリしながら食べるのが、何よりの楽しみであった。〈気持ち悪いね〉また、夜逃げ（これについては別途“夜逃げの生態学”参照—注1）してからの放浪生活の反動で、寿司屋に住み込んでからは毎食、大盛りちらしを2つつつ作ってもらって食べていた。現在54キロの体重が、当時は62キロにもなっていた。

さて、この周期性四肢マヒは、この後2回体験した。2度目ののは、埼玉の実家で夕食をたらふく食べて東京に帰ろうとした折り、足が何となくダルく、ムリして駅まで歩いたものの、階段

が昇れなくなって引き返した。そして3度目、これはもうこうすればあなたも周期性四肢マヒ症になれますという見本みたいなもので、独りで氷白玉あずきが無性にくいたくなり、ゆであずきのカンづめ8号カン（840グラム）に白玉だんごと氷をプチこんでウハウハくったところ、もの見事に翌朝マヒしてしまった。さすがに3度目ともなると、2時間経てば治ると思っていたので、それほどのパニックにはならなかったが、それでも万一このままずっと続いたら、という不安はあった。これにこりて、以後、甘いものは控えるようになり、東京支部長提唱の大食い同盟（注2）なるものからも脱退して、少食を心がけている。それが習慣化されると、ショートケーキも2つで気時悪くなるようになってしまった。＜まだ2つも食べてるんか＞ ものの本によれば、周期性マヒについてある医師が10人の被験者に多量のポタモチを食わせたところ、4人がこの症状を呈したとか。＜人体実験反対！ どうせするなら、コントロールとして、ポタモチだけでなく、大量のピフテキとか、「吉兆」の会席料理フルコース3人前とか、つけさすべきだ＞ また、チョコレートとかクリームみたいないわゆる洋ものよりも、ポタモチのような和ものの方が“効く”そうだ。とくにアンコともち米のコンビは効きそう一。

さて、あなたはこの不思議な病気を体験してみたいと思いませんか。＜思いません＞ そう思ったら、ゆであずきの8号カンと白玉粉を今すぐ買いに行こう。ただし、自分の責任において食べて下さい。

注1：未発表論文。近々発表されると思うので、乞御期待 —— 東京支部長

注2：“大食い同盟”とは、かつて私の身の回りにやたらと健康に気づかう人がいて、その人たちが断食合宿をやる計画を立てた。そして私や藤田君にも参加を呼びかけてきた。そこで、その合宿への参加を断わる時、「大食い合宿なら喜んで参加するけど、メシもくえないよしゃ……」と言った。そして、二度とこんなメシも食わさないような人道に外れた誘いが来ないようにと、“大食い同盟”を結成したのであった。（注） 当時から私が同盟委員長であったが、現在同盟員は私ただ一人である。—— 栗間

注2の注：この話は「大食い同盟始末記」として、近々本誌に発表される予定。乞御期待 —— 会長。

ある独裁の記録

栗 間 修 平

去る2月、20年間にわたりフィリピン国民の上に君臨し、独裁をほしのままにしてきたマルコスが、権力の座から転がり落ちた。最後の最後まで権力のいすにしがみつこうとする姿は、醜くもあわれであった。権力の座にあってこそ、勝手気ままにふるまい、威張りちらしてもおれただろうが、その座を失なえばそうはいかなくなる。だからこそ独裁者は、最後までみっともない悪あがきをするのだろう。

ところで、マルコスほど“大物”ではなく、もっとケチでチッポケな存在だけど、独裁権力をふるいたがる人間は、あちこちにいる。〈金沢大学理学部生物学科にもいる——会長〉私の職場にも、そうしたケチでチッポケな独裁者がいた。〈私の職場にもいく人かいる〉彼は3年前に実質的な権力の座からすべり落ち、その後1年間“参与”という名で職場に居座っていたが、2年前に完全に私たちの前から姿を消した。〈彼らはまだ居座っている。でもそのうち姿を消すだろう。停年は近い〉

最近“政治”というものがあまりはやらなくて、職場でも政治的な話が話題になることは少ない。〈ホント、ホント、大学でもそうや〉しかし、フィリピンの政変は珍しく話題になった。と言っても、マルコス打倒の意義と展望といったようなものとしてではなく、「あの野郎の最後と一緒にだ」といった感じでの話題である。彼も最後まで権力の座にしがみつこうとした。

私の職場は、ある官庁の外郭団体である。従って、管理職のほとんどは、その官庁からの天下りによって占められている。そして、わが独裁者もまた天下りの一人であった。彼の独裁ぶりはその官庁にも鳴り響き、役人も恐れおののいていた。そして、長い間独裁権力は放置された。私の職場で、形式的に一番地位が上なのは会長〈気易くこの言葉を使うな——会長〉で、その次が何人かいる副会長で〈生物学会にも副会長をつくるかな〉、そのまた次が専務理事である。かの独裁者はその専務理事として私たちに君臨していた。〈金大生協にも独裁的専務理事がいるよ。“民主的”党派の人らしいけど〉会長・副会長というのはいわば名誉職で、いくつかの大企業の社長や重役が名を連ねている。彼らわが職場に現われることはほとんどなく、職場の中での最高権力者は専務理事である。

わが小さな職場の最高権力者も、本来的には、二つの方向のより強大な権力の統制を受ける

ことになっている。一つは官庁からの統制であり、他の一つは会長・副会長からの統制である。前者については、前述したように、かの独裁者の時代には、独裁者を役人もが恐れおののいているようでは、その機能を果していなかった。とりわけ、わが独裁者がその地位に長く居座れば居座るほど、その統制は難しくなっていた。というのも、現役の役人たちはわが独裁者の役所での後輩という立場にある。時がたてばたつほど、わが独裁者からすれば、現役の役人が“若僧”になっていく。今肩書をもって役所でふんぞり返っている役人も、かつてわが独裁者が役人だったころには、ペイペイに毛のはえたようなものだった。それではいささか迫力に欠ける。もう一つの統制権力である会長・副会長の場合、彼らは名誉職であり、わが団体の中で何がおこっというといふと、余り関心はないと思う。わが団体の事業がそれなりの実績をもって営まれていれば、それでいいのだろう。しかも、彼ら自身大企業のトップに居座り、権力をふるうことにカイカンを感じていると思う。彼らから見れば、わが小さな職場の独裁者も、それこそケチなそんじょそこの中小企業のおヤジが威張っているようにしか、見えないうら。そんな訳で、本来的には統制を受けるはずの権力が無統制のまま、独裁者によって行使された。そして10数年にわたって、わが職場には独裁権力が吹き荒れた。＜わが職場にも10数年を経た今も吹き荒れている。だいたい息切れしてるようやけど＞

私が今の職場に入ったのは、10年前である。＜私は15年前である。関係ないけど＞ そのうち7年間を、その独裁者の下で過した。＜私は14年間も独裁者の下で過している。これも関係ないけど＞ その7年の間だけで、今数えてみても20人近い人間がわが職場から去っていった。＜金大生物科では1人だけである。大学の先生はニブいのかな？＞ この数は、現在わが職場に在籍している職員の数を上まわる。そしてその20人のほとんどが、独裁体制にイヤ気をさして辞めていった。

さて、独裁者の独裁について、その氷山の一角を紹介しよう。今考えれば、個々の話はどれもこれもたわいない話だった。しかし、それが日常茶飯時くり返されると、笑ってはおれなかった。しかも、内容がたわいないだけに、そこまで威張ったり怒鳴ったりされてはたまったものではなかった。今も私の職場では、その独裁者が君臨していたころと同じようなたわいもないことがくり返されている。そんな時、「専務理事が代わっていてよかった」と言って、私たちは笑っている。

独裁者というのは、まわりの人間を信用しないものである。わが独裁者も、彼の職場の部下を信用していなかった。元々ケチな独裁者であるだけに、その不信は極めてケチな現象として表に現われた。その一つとして“お茶何グラム事件”がある。私の職場は、労働安全衛生の講習会を主として行なっている。私を含めて何人かの講習会担当者は、月の半分位は職場に顔を出さずに、講習会場につめている。その時は独裁者と顔を合わすこともない。鬼の居ぬ間に……とばかりに昼寝をすることもある。秋には、会場を脱け出してシイの実をひろいに行くこともある。

<こともある……?> それはさておき、その講習会場でも、講師にお茶を出したり、また私たち自身お茶を飲んだりするので、お茶が必要である。そのお茶は、近くのお茶屋で買ってきて、講習会の経費としておとす。ところが、わが独裁者はこのわずかな経費がもったいないと思ったのか、あるいは私たちがガブガブむだにお茶を飲んでいると思ったのか、ある時「講習会場では1人1日何グラム位お茶を飲んでいるのかね?」と言った。これは計算しようがない。まさかハカリを持って行って、急須にお茶を入れる時イチイチ計って、しかもそのお茶を何杯の茶わんにそそいだか数えて……そんなことをする人間はいない。さすがにこの質問はバカけていると思ったのか、それ以上しつこく私たちに聞いてこなかった。しかし、万事このような調子で、私たちはアゼンとすることが多かった。

独裁者というのは身勝手なものである。わが独裁者も身勝手だった。突如として

「〇〇君、××から文書が来ているはずだけど、何でワシに見せないのかね?」

「見せましたけど……」

「いや、ワシは見えていない」

「しかし、見せましたよ」

「ワシが見ていないというのに、それでも君は“見せた”と言い張るのか!？」

「では、持って来ましょうか?」

「あたり前だ。すぐ持って来い!!」

〇〇君はその文書を独裁者の前へ持って行く。この独裁者は、役人時代からのクセで、自分が目を通したものには判を押す。私たちは「そのうち新聞にも判を押すようになるぞ」とうわさしあっていた。さて、〇〇君が独裁者の前に持参した文書には、はっきりと独裁者の判が押してある。そうすると「もういい」と言って黙ってしまうか、「イヤア、ワシの感じが良かった。ワッハハハ」となるか、どちらかだった。他人の間違いはきつくとがめるのに対し、自分の間違いは笑ってごまかすか、ほほかむりする。それは職場でしょっちゅうくり返されていた。

独裁者というものは、ユウズウがきかないものらしい。その一つとして“無届出勤事件”を紹介しよう。私の職場では、出勤した時に出勤簿に判を押すことになっている。ところが、つい押し忘れることがある。ある時、この押し忘れを独裁者が見つけた。普通ならば「〇〇君、出勤簿に判が押してないので、押しおきなさい」ですむと思う。ところが、わが独裁者の場合は、そうはならなかった。判を押すべき時に押ししていないのだから、その押し忘れた人間は出勤の届出を怠って職場で働いている、ということになるらしい。独裁者は、判の押し忘れて空白になっているその欄に“無届出勤”の四文字を黒々と書きこんだ。そして、出勤簿の整理・保管を担当している同僚にカミナリを落した。後で私たちはその四文字をシゲシゲとながめ、「無届で働いちゃいけないんだぞ」と互いに戒めあった。<これは本来「無届欠勤」として処理すべき問題である。何となれば、現実に働いているかどうか、ではなく、判が押されているかどうかですべて

を“判断するのが役所なのだから——かつて神戸市技術吏員を15年勤めた、現会長>

独裁者というものは、横暴なものである。わが独裁者の横暴さを紹介しようと思えば、枚挙にいとまがない。それを一つ一つ紹介するのは大変であるばかりでなく、今思い出しても腹が立ってくる。とにかく、職場でつい鼻うたを口ずさんだばかりに <鼻うたを口ずさむのは難しいよ> 怒鳴られた者もいれば、<研究室でモツアルトをかけていたら、やかましいとわざわざ怒鳴りこみにきた、はるか離れた部屋の教授がいたっけ> クシャミをただで怒鳴られた者もいる。<傍聴の学生が笑ったら、「笑うな！」と怒鳴った教室会議議長もいたよ> おかげで、私は放屁するにも“音のしないように、音のしないように……”と念じながらやったものだ。今は、独裁者もいなくなったので職場で鼻うたも公然ととび出している。私も安心して放屁している。私は人間が正直に出来ているから、今はへが出そうになると“へが出そう”と言ってから“プ”とやっているけど、独裁時代にはそうはいかなかった。<こんな下品な文章をタイプせんならん会長の身にもなってみろ。やはり職場に独裁者は必要だ> 自分の正直な心をおし殺して、それで知らん顔をしているというのは、本当はつらいことだった。

わが独裁者は、きわめつけのケチだった。小心でもあっただろう。おかげで、私はクビにならずにすんだと思う。私に「お前はクビだ」と独裁者が言い渡せば、私に対し彼は解雇予告手当を支払わねばならない。その上私が解雇撤回闘争を構えることは、目に見えていた。それでは彼には、割りがあわなかっただろう。だから彼は、私に懲戒事由が生じるか、あるいは私から「ヤメル」と言うのを待っていたと思う。ところが、私は自分から「ヤメル」などということは言わなかったし、トラックから落ちて懲戒解雇になることもなかった。<トラックから落ちると懲戒解雇になるんかね？ トラックをどこかへ落せばなりそうだが> 彼のケチのおかげで、私は今もクビがつながっているとも言える。<ついてながら、職場でいじめられている会員の皆さん、すべてこの精神でいきましょう。間違っても自分から「ヤメル」などと言ってはいけません。給料をくれている限り、雇庸者は君を必要としているのです>

独裁者の個々の行状を記していけばきりがない。このへんでやめておく。<有難う> とにかく、いくらでも笑いたくなる話題を提供してくれた。しかし、それを本人の前で笑ったりしたら、大変なことになる。本人は、東京帝国大学出身の頭のいい“常識人”だと思っているのだから……。部下をしかる時、「君は非常識だねエ」という言葉をよく吐いた。それでいて、ホッチキスの針の入れ方もわからない人だった。もう独裁者の行状を書き記すのは“やめておく”と書いたばかりなのに、また書いてしまった。“非常識”と言われそうだ。

さて、この独裁の日々はいつまで続くのか？ 「彼は死ぬまで今のイスにしがみついているだろう」と私たちは思っていた。ところが、独裁者はピンピンしているのに、そのイスから離れる日が、突然やってきた。3年前の5月のある日、彼は私たちの前に1人の男を連れて来た。そして、「今度、こちらに来てもらうことになった〇〇さんです。彼には、私の仕事をひきついて

もらう予定です」と紹介した。その〇〇さん、現在の専務理事であるが、その年の3月まで官庁にいた人で、私も顔と名前だけは知っていた。私たちは、正直なところ少々混乱した。独裁者が本当に私たちの前から去るのか、それとももう一波乱あるのか？ と言うのも、何年前にも専務理事の交代要員が官庁から送りこまれたことがあった。しかしその時は、わが独裁者は猛烈な反撃に出た。そしてわずか2～3か月のうちに、その交代要員を職場からイビリ出してしまった。そんなこともあったので、私たちは“今回も……”という不安を抱かざるを得なかった。ところが、約1か月後にわが独裁者はアッサリと専務理事のイスを明け渡した。そして“参与”という地位についた。

前述したように、わが独裁者に対する官庁からの統制は難しい状態になっていた。少なくとも私はそう思っていた。しかし、独裁者はアッサリと身を引いた。どういう経緯でそうなったのか、私たちにはわからない。私たちの目には見えない所で、一波乱も二波乱もあったかもしれない。ただ言えることは、官庁もそれなりの決意を固めるべきところまで来ていたのだろう。と言うのも、わが職場の管理職のポストのいくつかは、天下りの為に用意されている。ところが、独裁者が独裁権力をふるい続けていると、わが職場の天下りポストに空きが出来ても、だれもそこには天下りたがらなくなる。そういう事態が生じつつあった。それでは官庁としても困る。実際に、“政権交代”から1年後に、一人の部長が交代した。辞めた部長は天下ってから既に8年になっていた。そろそろポストを明け渡す時期だった。新任の部長は、独裁者がいたらわが職場には天下るのを断った、独裁者が辞めたので天下った、という旨のことを、私たちに語った。

“政権交代”はスムーズに行なわれた。しかし、私たちは安心出来なかった。独裁者が権力を失ない、以前ほどは威張り散らさないとはいえ、まだ彼は私たちの職場に居座っている。いつ奪権闘争を開始するか、知れない。参与の任期は1年である。この1年、彼がおとなしくしてくれようか？ 私たちの不安はだんだん現実のものとなっていった。任期切れの日が近づくと、彼の動きがあわただしくなった。専務理事復帰はありえないとしても、彼が何らかの権力意志を持った行動に出たことは明らかだった。彼は、一体どういう権力を掌握しようとして、動き出したのか？ 怪情報が乱れとんだ。そして、私にわかりかけてきたのは、二つの可能性だった。一つは、わが職場のような“外郭団体”の全国連絡会議の事務局をわが職場内に設置し、彼がその事務局長に就任するというものだった。＜一言いうてくれたら事務局長のポスト位、いくつでもつくってやるのに＞ もう一つは、常任の副会長のポストをつくり、彼がその席に座るというものだった。この二つの可能性故に、彼は1年前、私たちが意外と思う程アッサリと専務理事の座から降りたのだろう。この二つの可能性のどちらかの実現へ向けて、彼は最後の権力闘争にうって出た。具体的にどういう攻防が戦われたのか、私たちには見えなかった。結局、この二つの可能性は現実のものとはならなかった。が、最後まで権力を求めて動く姿は、すさまじいものだった。任期切れ直前まで彼はがんばったが、とうとう私たちの前から姿を消す日がやって来

た。私のように気の小さい人間は<だれが?>、情勢がどう転ぶか心配のあまり、丁度そのころ十二指腸かいようの再発を招いてしまった。<切っ飛ばしえ!>

独裁者が去って、わが職場は非常に風通しがよくなった。これまで“非合法下”に置かれていた鼻うたクシャミも公然ととび出すようになった。お茶をガブガブ飲むことも出来るようになった。が、基本的なものは本当は何も変わっていないだろう。独裁によって吹き出た様々な矛盾を、私たちが職場の中から解決したのではないのだから……。それでも、あの独裁の日々に比べたら、今はずいぶん明るい職場になった。

独裁者を追い出せば、職場はもっと明るいものになる、それがわかっていながら、何故私たちは皆の力でたった1人の独裁者を追放出来なかったのか? 今から考えれば、これが独裁の一番やらしい点だと思うけど、独裁が独裁を再生産していた。<生物学会会長の独裁も、金大生物学科の教授独裁の拡大? 再生産だもんね> 独裁が長びけば長びくほど、その独裁を“しかたがない”“あたりまえ”として受け取り、独裁になじんでしまう傾向が生まれていた。<ウチには“なじまん”のが1人いてね。独裁教授も我々も困ってる> そして、独裁下でのミニ独裁者が現われ、更にはその下にミニミニ独裁者も現われていた。<ウチでは教官・職員をとびこえて、学生の中にちょいちょい現われるね> 彼らの思考パターン・行動パターンは、そのまま独裁者の思考パターン・行動パターンをミニチュア化したものだった。<異議なし!!!> そうなった後では、“皆の力”など無いに等しくなった。それでも何とかしようと思うと、職場から完全に浮き上がってしまう。現実には、私は職場で全く孤立していると感じる時期もあった。<“連帯を求めて孤立を恐れず”なんてカッコいい言いぐさがあったね、むかし> 私も、ミニ独裁者やミニミニ独裁者が目に見えるだけに「結局アイツらは……」と思い、自分のカラを固く閉じてしまった、とも言える。<君には“反省回路”が備わっていないのかと思ってたが、そうでもないんやね> そんなことで、結局、内部からの反乱は組織されないままについえ去った。

わが職場の独裁者の更送は、ある種の上からの“民主革命”だった。そしてそれまで“非合法”であったものも解き放たれた。<ウチでも昨年理学部長による生物科の上からの“民主革命”の動きがあっただろ。これは独裁教授とのたくまざる共闘? によってつぶれた> だが、この“民主革命”をどう発展させるかは、職場の中で働いている私たちにかかっている。<発展なんて無理やで> そう考えながら、風通しのよくなった職場で、私はたまったガスを公然と思いつり尻から吹き出している。<まあそんなところやね> 風通しがいいから、あまり迷惑にならないだろう。

以上が、わが職場におけるケチな独裁をめぐるテンマツである。ところで、私の身のまわりには、もう一つ二つの独裁権力が存在している。それは、日本生物学会をめぐる独裁である。日本生物学会は、規約の上で公然と宣言しているように“会長独裁”である。そして日本生物学会東京支部も、支部長である私の独裁下にある。東京支部では、去年1年間に、北海道へ帰った人、

四国へ行った人、更には中国に渡った人と3人の支部員が“東京支部在籍”のまま東京を離れた。この事実をもって、東京支部が全国制ハの野望を抱いているとか、東京支部長が独裁会長への反乱の工作員を国内外に配置した等の誤解が生じたら困る。私＝東京支部長は日本生物学会の独裁会長にタテついたり、弓を引くなどという大それた考えは全く持っていない。＜そんなことしたら、原稿書いて、タイプたたいて、印刷して、製本して、発送せんならんもんね＞むしろ、日本生物学会の発展を願ってこそ、3人の支部員に海を渡ってもらった。恐らく3人とも、そんな重大な使命を自分が担わされているという意識は、全く持っていないと思うけど……。それはさておき、日本生物学会の“会長独裁体制”が揺ぐか揺がないかのキーポイントは、恐らく1人の女性が押さえていると思う。＜犯罪の陰に女あり＞彼女がイメルダの役を演ずるか、はたまたアキノ女史の役を演ずるかによって、そこは決まる。私は、今は独裁会長に忠誠を誓っておく。が、反乱がおきた後はわからない。私もまがりなりにも東京支部の独裁者だから、その時は必死に“権力”にしがみつくだらう。そして“東京支部長独裁”を保障してくれる側につくと思う。＜それやったらエンリレ国防相やんけ＞

※ 編集局より

「わが職場の独裁者」という原稿募集します。そんなもの書いたとて独裁者がいなくなるわけではありませんが、まあ、気晴しくらいにはなるでしょう。ただし、クビにならないようにうまくごまかして書いて下さい。

かくれキリシタンのはなし

本郷支部長

つぎにお話するのは、現代に生きるかくれキリシタンたちのかなしい物語です。

かくれキリシタンといっても、キリスト教信者のことではありません。キリシタ教という、一般にはあまり知られていない教えを信じている人たちです。キリシタ教は1818年にドイツで生まれたサルマという人がかんがえだしたものです。サルマの親友のスレゲンという人も創始者にあげられることもあります。ふつうはサルマが創始者ということになっていて、サルマ教ともよばれることがあります。歴史上、何人かの偉大な伝道者たちがあらわれましたが、比較的知られている人といえば、ロシアのニシレ、中国の西沢毛などです。なぜキリシタ教とよばれるようになったのかはよくわかりません。一説によると、かつて権力欲のために全世界のキリシタ教徒を自分の支配下に置いていた歴史上の人物、ニラトスが、自分に反抗した信者を拷問にかけて、その舌を切ってしまったことからこうよばれるようになったという人もいますが、ほんとうのところはわかりません。

キリシタ教の教えは簡単にいうとつぎのようなものです。われわれのいる世界の根本は「生成デモ」というものによってかたちづくられています。生成デモは時間がたつにつれて変化していきますが、その変化はゆるやかなので、普通は不都合がおこることはありません。しかし、変化の時期にさしかかってくると、いろいろな異変がおこってきます。生成デモは世界の根本ですから、長い間に人々はそれに適応し、そのうえで自分の生活を築いています。これが変化してしまうのですからたいへんです。とくに、古い生成デモのうえで金持だったり、位が高かった人たちはその身分を失なうまいとして、まずしい人たちからお金を奪い取ったり、まずしい人たちをこれまで以上にこきつかったりするようになります。しかし、かれらのあがきも長続きしません。あたらしい生成デモがうまれるとともにかれらは没落し、まずしい人たちは解放されます。歴史はこのくりかえしです。しかし、いつかは窮局的な生成デモがうまれます。これをコンミュン生成デモといい、これはいつまでたっても変化しません。そして世界がこの段階にたつると、すべての人たちは自由で平等な暮らしをおくることができます。人間はこの窮極的な生成デモがはやくうまれるようにつねに努力をおこってはなりません。

わたしはキリシタ教の信者ではないので、すこしは不正確なところがあるかもしれませんが、だいたいのはこれでおわかりいただけると思います。

みなさんの多くは、キリシタ教などほとんどしらないとおもいます。でも、信者はおもいがけないほどたくさんいるのです。それがしられていないのは、かれらが自分の信仰をかくしているからです。とくに、石川県のような田舎では、近所の人に「あいつはキリシタンだ」とうわさされただけでも大変です。会社はクビになるし、お嫁さんもきてくれません。〈それはちとオーバーだろう——会長〉というのは、キリシタ教では女性はみんなの共有物になっているので、娘は純潔を失っているし、結婚してもすぐ浮気をするという、事実無根の偏見があるからです。キリシタンにはいくつもの教団がありますが、そのなかでもいちばん主張がおだやかで、差別されることの少ないウトンサ教団でさえ例外ではありません。これは実際にわたしが目撃したことです。ウトンサ教団の月刊教書（新聞のようなもの）は、偏見の強い地域では信者が一部づつ、中身がわからないように無地の封筒に入れて配布するのです。月刊教書（ほかに日曜版教書、グラフ教書、月刊誌の「善栄」などがあります）は、信者ではないけれど共感をもっている人たちも読んでいて、こうした人たちに迷惑がかかってはいけなからです。ウトンサ教団でさえこうですから、ほかの教団ではもうたいへんです。とくにキリシタ教の原則をかたくなにまもっている保守的な教団では、教書を封筒に密封するのはもちろんのこと、読んだらすぐに焼き捨ててしまいます。教団の内部でも、教徒たちはおたがいに偽名でよびあっています。

さて、これでキリシタ教徒についてのだいたいのことはおわかりになったでしょう。それではこれから、もう少し具体的にかれらの生活についてお話することにしましょう。キリシタ教の教えは、哲学や社会科学にも応用されています。キリシタ教徒の研究者たちは、できることなら教えにしたがった研究をしたり、それをひろく発表したりしたいのです。しかし、それは現実にはとてもむずかしいことです。たとえば、とくにキリシタ教への偏見が強いアメリカでは、1970年代にはいる以前、大学の教官で自分はキリシタ教徒だと公言しているひとはたったひとり（ナラブという人です）しかいませんでした。日本ではここまでひどくはありませんでしたが、それはサルマの書いた本の解釈や注釈だけをやっていたからです。教えをそのまま自分の主張として前面にだしたりすれば、あちこちから攻撃をうけて、生活があぶなくなってしまうのです。かれらの生活は、このジレンマに支配されています。このジレンマはまだ大学にやとわれていない大学院生ではとくに深刻です。いくつかの例を紹介しましょう。

A君は、大学に入学してすぐにキリシタ教徒になりました。学部生のころはしばしば友人たちにキリシタ教のことを話したりしましたが、大学院にはいってからはまわりに気軽にはなせるような人がいなくなりました。このころの彼の唯一のやすらぎは、月一回の勉強会でした。月末の日曜日になると、東京から電車で2時間もかかるところにある一人の教徒の家に集まってサルマの本を読むのです。彼の研究テーマは貧しい労働者たちの雇用状態です。もちろん、労働者の苦しい生活が古い生成デモのせいだとか、金持たちが生成デモの転換をおくらせようとしているからだなどとは主張できません。彼はただただ、労働者の雇用状態の不安定という事実

だけを主張しているのです。しばらくして彼は地方にある小さい大学に就職できました<さずが東大> そこでもけっして自由になったわけではありません。下手なことをいうと、学会のホスににらまれていろいろな研究プロジェクトからはずされてしまうからです。<結構なことやないか、自由に研究できるようになって> 授業でも思ったことはいえません。学生のなかに教授や政治家と通じているものがないともかぎらないからです。<そういう奴を逆に使って、教授に言い分を伝えるという方法はどうかね> しかし、彼はごく親しい少数の学生が集まるゼミでは、少しは自分の主張をのべることができるようになってきました。それがいまの彼の生きがいです。この点では彼はまだ恵まれた方だといえるでしょう。<その通り>

Bさんは、やはり大学に入学してもまもなくキリシタ教徒になりました。彼女は学生時代は戦闘的なキリシタ教徒で、キリシタ教徒のみならずさまざまな理由で差別されたり抑圧されたりしている人々を解放するためにたたかっていました。<差別したり抑圧したりしているキリシタ教徒はよく知ってるけど、そんな教徒もいるのかね> 自分の考えははっきりと主張したし、それを聞いてくれる友人たちもいました。しかし、大学院にはいるとすべてが変わってしまいました。まわりにはいるのは学者ぶってえらそうなことを言う人たちばかりです。キリシタ教の話などしようものなら、すぐにむずかしい言葉をつかって論破されてしまいます。<それは勉強不足か、キリシタ教の教えが間違っているが、どちらかにすぎない>しかたがないので、ふだんはあたりさわりのない研究をしています。彼女の専門は教育学です。ほんとうは、古い生成デモを維持しようとして、金持ちたちが教育を好きかってに利用している現状を批判するような研究がしたいのです。だけど、そんなことをすると、ただぞえ女子院生の就職はむずかしいのですから、将来の展望がなくなってしまう。<展望は人を誤らせる — マルサ> やりたい研究ができないので、彼女はしばしば人に愚痴をこぼすようになりました。最近、彼女は論文を一つ書いて、学会誌に投稿しました。学会誌には審査というものがあります。偉い学者たちが集まって、「この論文はよくできているので載せてやろう」とか、「この論文はできが悪いから載せてやらない」というふうに決めていくのです。ですから、キリシタ教の教えをとりいれたような論文は載らないようになっていきます。彼女は迷った末、論文に、「キリシタ教の考えは日本にはあてはまらないのでここでは検討しない」と書きました。論文は審査を通過して、学会誌に載りました。<日本生物“学会誌”のことを教えてやれよ。この“論文”が載っていることからわかるように、当学会には審査などない。もっとも、変なく >が間にはいるけど>学会誌に論文が載ると、一人前の研究者として認めてもらえます。<おめでとう> でも、彼女は自分のやり方が正しかったのかどうかと、いまでもときどき悩むことがあります。<「存在は意識を決定する」— サルマ — から悩まなくてもよい>

次は、大学を卒業して就職した人の例です。

O君は、大学を6年かかって卒業し、<うちの息子は6年半、関係ないけど> 会社に就

職しました。キリシタ教は大学の一年生のときに知りました。もっとも、彼は学生のころはあまり熱心な信者ではありませんでした。キリシタ教のほかにも心をひかれるような教えがいくつもあったので、それらをいろいろ勉強して比較するのが楽しみでした。友人の信者が「正しいのはキリシタ教だけだ」などと力説すると、わざとさめた顔をして反論したりもしました。彼はとてもインテリで、ものごとを客観的にみるほうだったのです。しかし、会社にはいると彼の生活は一変しました。毎日が商品の売りこみと書類の整理にあげられます。彼はそんな生活がいやでなりません。毎日のように酒を飲んで、泥酔して帰るようになりました。いまでも学生のころと同じアパートに住んでいるので、会社の帰り道にはときどき大学院にいている友人にあうことがあります。そうすると彼は学生時代にもどったような気分になっていろいろと論争をふっかけようとします。しかし、友人のほうは、彼がただ昔をなつかしんでいるだけなのがわかっているので、あまりまじめに相手をしません。彼はいま、毎日サルマの本をカバンの奥にいれて会社へかよっています。もちろん、会社で本をとりだしたりすることはありません。それどころか、家で読むこともいまではめったにありません。でもカバンにいれたこの一冊は、彼が完全には会社人間にはなっていないことの証であり、彼の心のささえなのです。

<サルマが聞いたらもらい泣きするやろね>

こんどは、年配のかくれキリシタンの例です。

Dさんは、師範学校にいたときにキリシタ教を知りました。日本でも戦後の一時期、キリシタ教が盛んになりかけたことがあります。そのころDさんは戦闘的なキリシタ教徒として活躍していました。Dさんは高校の先生になりましたが、そこで長い間、組合にキリシタ教の影響をひろめようとがんばってきました。しかし五十の声を聞き、息子が大学にはいったころ、かれはキリシタ教の活動をやめることにしました。このまま活動をつづけていると、まず校長にはなれません。<キリシタ教でなくとも“教授”になれない“助教授”もいるよ>奥さんはもうだいぶ前からキリシタ教の活動をやめるようにすすめていたのですが、彼もそろそろ平の教師で終わるのがこわくなってきたのです。<“こわくなった”というのは面白いね>彼は組合をやめ、キリシタ教の信者たちとも会わなくなりました。もっとも、いまでも彼は自分のことをキリシタ教徒だと思っています。ときどきはキリシタ教の本も読み、選挙になるとかならずウトンサ教団の候補者に投票します。大学にいている息子が帰ってくると、東京のキリシタ教徒の活動のことをいろいろと聞こうとします。息子は息子で、キリシタ教の話をしてやると親父が喜んでお小遣いをくれるので、田舎に帰るときには、キリシタ教の話題を二つ三つ仕入れていくことにしています。組合をやめて三年後、Dさんは教頭になりました。いまでは、人前で組合の悪口もいうりっぱな管理職です。校長はもうすぐです。

かくれキリシタンといってもやはりそれぞれの生活をもっている人たちですから、立場も悩みも一人一人ちがいます。だけど、以上にあげた4つの例で、彼らの置かれている状況はだいたいわかっていただけたと思います。<でも、インテリ教徒ばかりだね>

かくれキリシタンたちは、みんな根はいい人たちだと思います。<“おもて”キリシタンの方は、根の悪いのが多いね> しかし、どこかうっ屈したところがあります。それはそうでしょう。だって、自分の考えを表に出すことができないのですから。<教授についた学生も同じだよ。かくれキリシタンでなくともね> そんなかくれキリシタンを、ほくはかわいそうだと思います。<そんな学生を、ほくもかわいそうだと思います>

あなたの身近なところにも、きっとかくれキリシタンがいます。<私の身近なところにはそんなしおらしいのはいないね。>

生物学誇大辞典

チョウチンアンコウ

一口にチョウチンアンコウといっても種類はいろいろあり、ずんぐりと丸いのや、口の下にヒゲを生やしたものがいる。しかし、口は耳まで裂け、頭の上に長いサオを立てて擬似餌をつけ、常に薄暗い“ぞうけの塔”の底にすわっている点は共通している。さて彼らは、時に1~2匹の手下をしたがえて、それぞれ独立の権窮室というほら穴に生息しているが、世の中の経験がまだ不足している20才前後の子魚が近づくると、歯を見せないように用心深く口を閉め、擬似餌を見せびらかしながら誘惑する。もちろんこれは実のある餌ではない。でも、経験不足の子魚には、これが国際的に通用するおいしい餌だと思ってしまうのである。かくて、一度近づいたが最後、アンコウはその巨大な口をガバッと開けて、子魚を吸いこむ。吸いこまれた子魚が、そこに並んでいるキバに気づいた時はもうおそい。泣こうがわめこうが、はたまたグチをこぼそうが、アンコウが放してくれるはずはない。こうして子魚は骨の髄までしゃぶられて捨てられ、アンコウの方はその養分をもとに国際学会へ出席したりしている。なお、筆者は子供のころ、水面まで上ってきたアンコウが、鴨を丸のみしている図を、絵本で見たことがある。→カモ(鴨)

— 魚から人間までの歴史 —

奥野良之助

第3章 せきつい動物の起原

かのチャールズ・ダーウィンが、「生物(種)は神サマが創ったんやのうて、勝手に進化してきたんやで」とのたまってからというものは、多くの生物学者はさまざまな生き物の「起原」の問題にうつつをぬかし始めた。その中でも人気があったのは、多細胞動物の起原、せきつい動物の起原、そして人間の起原である。もちろん、最大の問題として生命の起原もあったが、当時の科学の水準ではあつかいかねて、ずっとおくれる。多細胞動物の起原についてもいろいろ面白い話があるのだが、私の尊敬する — 皮肉でなしに — 先輩、西村三郎氏が書いた、「動物の起原論 — 多細胞動物への道」(中公新書685)という非常にすぐれた本があるので、おまかせしておきたい。西村三郎氏は勉強しかない勉強家で、勉強だけはしないというどこかの会長とちがって、その言説には重味があり信用できることは、私が保障にならない保障をしておく。ただし、真面目に書かれた本だから、生物学会誌などちがって、ちゃんと机の前にすわって読んでいただきたい。生命の起原については、オーバーリン・石本真訳「生命」(岩波)をすすめておく。理由は、数式がなく哲学があるからである。数式が好きな会員は当会にはまずおるまい。と、いって、みんなが哲学好きだとも信じられないが、まあ数式よりはましだろう。だいたい、すべての人が面白がって読む本などというものは、「日本生物学会誌」をおいて他にはない。金沢大学生物学科の教授は面白がらないだろうって? そんなことはない。新しい学会誌が出ると、教授たちはさまざまな方法で手に入れ、熱心に読んでいる。

人間の起原は、ダーウィンの「種の起原」が出たときいちばん問題にされたところで、論争は今にいたるまで続いている。それにまつわる話は、すでにいくつか書いておいたから、ここではもう書かない。たくさんたくさん本が出ているが、ダーウィンが書いた「人間の起原」が訳されているのは、意外知られていない。池田次郎・伊谷純一郎共訳で、中央公論社の「世界の名著」シリーズの1冊として出ている。と、そそのかされて買う人もいるかも知れぬが、この大著を読み通せる人は、当会会員の中にはいるまい。もしいたら、それは会員の資格がない。と、いって、別に除名するつもりはないが。

さて、ここで語らねばならぬ — こともないが — のは、せきつい動物の起原である。これには実は、手ごろな本がない。ないことはないが、日本語に翻訳されていない。それは、ペリルなる人が書いた、「オリジン オフ サ ウ"アーテプレイト」すなわち「せきつい動物の起原」という本である。出版は1955年、ちょうど私が学生のころで、私の恩師、故徳田御穂氏がいち早くこれを読み、一時「ペリル、ペリル」とさげんでおられたことがある。だから、一応その本の名前は知っていた。

話は変わるが、私の同僚に、富家さんなる人物がいる。ここ20年余り、教室改革、非常勤職員定員化、学生の“教育”に積極的にとりくむかわら、ホヤなる動物をこつこつと研究し、いまやノーベル賞も近いとうわさされている — 私が流したのだが、裏づけがあるから“うわさ”はいまや1人歩きしている — 国際的一流研究者である。話はまた変わるが、アメリカに魚類・両生類・ハ虫類学会というのがあって、その学会誌を「コペイア」という。アフリカのワニが、手こぎのカヌーには何も反応しないのに、それにエンジンを付けるとかみつきにくる。きつとエンジンの音でいらいらするのだろうか、南アメリカで珍しい鳥を射ち落したところが、さっと現われたイグアナというトカゲにその鳥を横取りされ、イグアナが草食性だというのは真っ赤なウソだと怒っている鳥類学者の論文だとかが載っていて、私の愛読している雑誌である。それに、なぜ「コペイア」などという名前がついているかということ、これは有名なアメリカの古生物学者コープを記念した名称なのである。我が日本生物学会も、そろそろ欧文誌を出してはどうかという声が高いのだが、とりあえず雑誌名だけは決めた。それを「フケイヤ」という。子供のころに「人のいやがることを進んでしなさい」としつけられた富家さんは、いまでも「人（とくに教授）のいやがることを進んで」しているので、いやがっているえらい人はたくさんおり、この表題は必ず全面的に支持されるものと確信している。

さて、ある日のこと、その富家さんが1冊の本を持って現われ、「ねえ、ねえ、この本、一緒に読まない？」と宣言した。これは“命令”に等しい。また話がすべていくが、数年前、富家さんはこともあろうに、車の免許をとるのだと言い出した。我々は全員一致して、思いとどまるよう説得これつとめた。別に、事故を起こすことを心配したからではない。そうならば — 我々も含めて — 喜ぶ人は多かろう。問題は、もし何かの間違いで、免許があたってしまったあとに起こる。おそらく彼女は、「ねえ、ねえ、乗らない？」とくるであろう。乗るのは怖い。でも断わるのはもっと怖い。我々の説得も空しく、27回の補習の結果、遂に免許が当たってしまった。当人は、「人の倍も練習したのだから、私、運転上手なのよ」とごきげんだが、我々の方はそうはいかない。深刻な顔を集めて相談した結果、私が犠牲になることになった。子供が大きくなっていて、いつ死んでもいいのは私だけだったからである。恐怖の10数分ののち、ある交差点の信号待ちを機会によやく解放してもらった私は、半ば放心状態で交差点を渡っていたら、左折してきた車に危くひかれそうになった。これが、いま降りたばかりの富家さんの車だったのである。乗せてもらっている間だけでなく、降りてからも用心しなくてはならない。なお、富家さん

の名誉のためにつけ加えておくが、それから数年、運転も上達して、こともあろうに追い越し車線を走っているのを見た人がいる。

要するに、だから、富家さんのさそいは命令と同じなのである。さそわれたからには、何が何でもやらなきゃならない。唯一つ残された手段は、その輪読会のメンバー、つまり犠牲者の数を増やして被害を分散させることしかない。私は同志を集め、遂に助教授3人助手2人の豪華メンバーとなった。

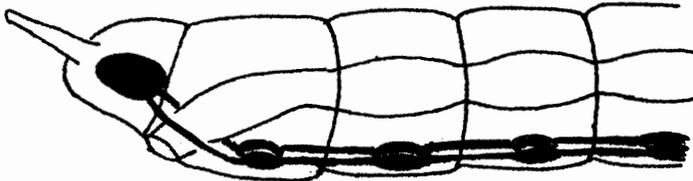
ところで、少々面倒な本を何人かで輪読しようという時、長続きする方法をお教えしよう。第1は、予習を禁じることである。予習などどうせできなくなるから、予習しておかないと判らない輪読会では、たいてい次々とぬけていく。第2は、紹介者を決めたりしないことである。紹介する人だけが勉強してくるのだから、他の人はもうひとつよくわからない。結局、本と辞書だけ持って集まるのがよい。そして、順番だけ決めてともかく読んでいく。当たった人は、ひとつの段落を声を出して読み、読みながら訳を考える。他の人はそれを聞きながら訳を考える。わからない単語が出てくると、だれかが辞書をひく。慣れてくると、読み上げるのを聞いているだけで、その人のわからない単語が見当つくようになる。そこで先まわりしてひいておくと、時間の節約になる。難しい文章はその場でみんなが知恵を出し合う。5人寄ってもわからぬものはわからぬが、1人で読むよりはましである。この方法のよくない点は、時々流れるようなアメリカ英語でペラペラやる学生が出てくることである。そのすぐあとに、戦時中敵の国の言葉だというわけで軽べつしながら賞えさされた英語を読み上げるのは、少しは気にならないわけではない。「オレのは軽薄なアメリカ語ではない。唯緒正しいキングス・イングリッシュや」と言うのだが、学生はもちろん信用しない。「大阪弁の英語や」という奴もいる。まあ、英語力はすべてばれてしまうが、それさえ我慢すれば、この方式がいちばん長持ちする。段落に長い短いがあって、50にもなる教官が、「オレのところ、長いやないか、こんな不公平や」とマジで怒ったり、仲々楽しいものである。

さて、この時富家さんが持ってきた本というのが、当のペリルの「せきつい動物の起原」なる本であった。300ページほどの本だが、5人がかりで読むのに3年もかかった。ペリルという人は大変えらい学者であって、何でもよく知っているのだが、読者も自分と同じだけ知っていると知っているらしい。だから、私たちにとっては何のこともやらさっぱりわからぬことが、全く説明ぬきでいきなり出てくる。まあ私だって、読者は私と同じくらい知っていると書いてあるのだが、何分当方の知識水準が低いものだから、私の書いたものはだれにでもわかると好評である。これまで賞められたと思って喜んでしたが、どうもそうではないらしい。これからは、よくわかると言われたら怒ることにしよう。それはともかく、我が中年輪読会には発生学の専門家がいたので何とか最後まで読み通せたが、1人だったらまず10ページ以内で放り出したにちがない。徳田御穂先生だって本当に読んだのかどうか、わかったものではない。

さて、話はせきつい動物の起原のことであった。ダーウィン以後、いろいろな学者がいろいろなことを言っている。例によって面白そうなのを2つ3つ紹介しておくことにしよう。

ミミズをひっくり返すとせきつい動物になるという学説がある。ここで、成程！とひざをたたかない人は、この連載をちっとも真面目に読んで来なかった人である。と、非難しているわけではない。こんなもの真面目に読まれたら、著者が困惑する。この間、見たこともない学生から、「先生は講義でこんなことを言われましたが……」と話しかけられ、ぞっとしたことがあった。講義とは、学生が忘れることを前提としてやっているもので、覚えているのは約束違反である。また、おおむね約束は守られているようで、だから私もまだ大学に勤まっている。

かつて、キュウヰエの4つの基本型なる話をした。せきつい動物、軟体動物、環節動物、放射動物の4つである。ミミズは環節動物に属していて、その体制の原型は、腹側に神経系が走り、背側に消化管が走っていることである。すると、ミミズをひっくり返せば、背側に神経系、腹側に消化管が来て、たちまちせきつい動物の基本型が出来上がるではないか。単純に絵に画いたような説だが、学問というものは、本当は単純なものほど優れている。だから、この説を私は大変好きなのだが、1つ難点があって、つぶれてしまった。その難点を説明するためには、ミミズの体の構造の話をしなければならぬ。



ミミズの体はたくさんの節に分かれている。これを体節という。あらかじめ1つであった体があとで体節に分かれたのではなく、一度に複雑な全体をつくるのは大変だから、少しずつつづいて継ぎ合わせたと考える方がわかりやすい。体節は、だから、それ1つだけである程度完結した構造を持っている。ミミズにはないがムカデでは、1体節に左右1対の足がついている。ヤスデは1体節あたり2対である。だから、ムカデを百足と書き、ヤスデを千足と書く。でもこれは数学的に間違っている。ムカデが百足ならヤスデは二百足と書かねばならぬ。それはともかく、体節のひとつひとつには排せつ器官もそなわっている。つまり、自分とこでつくり出した老廃物は、ちゃんと自分とこで処理しているわけである。決して夢の島などへまとめて捨てていくようなことはしない。そして、今問題の神経系もまた、各体節に1つ（正確にいうと1対）つつの中樞、すなわち神経節をそなえている。

ミミスから進化してきたのは、実はこん虫であって、彼らも基本的には体節構造をとっている。こん虫の胸部は、もともとの体節3つがゆ合したもので、だから神経節も3対ある。足も3対6本である。はねは、しかし、1対退化して2対となった。この足やはねを支配しているのは、胸部にある3対の神経節であって、頭にある脳ではない。そこでカリウドバチは獲物をうまくひっくり返してこの3対の胸部神経節を針で刺す。するとこん虫は、生きているのに足もはねも動かせなくなる。カリウドバチはこれに卵を産みつけ、かえった幼虫は獲物の体の中をすっかり食いつくして成長する。死んでいないからいつまでもくさらないのである。大学にはこういったカリウドバチがたくさん住みついていて、常に獲物をねらっている。考えるということほとんどしない、こん虫的な学生がやってくると、たちまちとびかかって針で刺す。当人の気づかぬうちに手足と口がマヒしてしまって、1年（4年生）か2年（院生）のうちに中身は食いつくされ、丸々と太った幼虫は変態してペーパーとなり、ひらひらと飛び出す。もっとも、私のいる金大生物科ではこのところ、幼虫は出てくるのだがいつも変態に失敗して、ペーパーにならない。1年や2年ではだめだと考えたカリウドバチは、その上に3年コースというのをつくった。でも、本当は、仕込む卵の質が悪いのが原因だから、たとえ10年コースをつくってもだめだろう。書くところを間違えた。これは「生物学誇大事典」用だった。

とはいえ、足や排せつ器管ならともかく、いくら体節に分かれているとはいえ、神経系はつないでおかなければ、どうにもならない。そこで、1対の神経節に1本ずつ、2本の神経索でずつつながっている。ハシゴみたいだからハシゴ状神経索という。ついでにいうておくと、せきつい動物のせき髄は中空で、だから神経管という。無せきつい動物のは中までつまっている。だから、ミミズをひっくり返して神経を背側へもっていったところで、せきつい動物にはならないのだが、当時はそんなことまで考えなかった。ただ、困ったのは、いちばん前の部分である。ずっと腹側を通ってきたハシゴ状神経系は、ここで消化管の左右をう回して背側にまわり、「脳」で終わっている。そのままひっくり返したのでは、脳の上に口がついてしまって、「福笑い」の顔みたいなことになってしまう。

さて、この難点を救うには、口を下へもっていくか、脳を上へもっていくか、2つの方法しかない。つまり、古い口を一時閉じて新しい口を下側に開くか、古い脳を廃止して上側に新しい脳をつくるか、である。どういうわけか、学者はみんな、新しい口をつくる方に熱中した。それがムダな努力であることは、言わずとも明らかであろう。たとえ1日といえども口なしではすげせないことは、ミミスから人間までの動物の宿命である。我が友人の水原洋城氏などは、ほんの1~2時間口を封じられただけで死んでしまうに違いない。かくてこの学説はざ折してしまった。私の思うに、ここはやはり脳を退化さすべきであっただろう。もともとミミスやこん虫の、いちばん前の神経節は、脳とは呼ばれてはいても、他の体節の神経節とさほど違いがあるわけではない。口とはちがって、1日、2日、いや2年でも3年でも、なかったってどういうことはない。

あちらの学会、こちらの学会を渡り歩いて、しゃべってあればいいのだから、口さえあればちゃんと生きていける。だから、古い脳を退化させて、第2体節の神経節を新しい脳とすれば、この難問はたちまち解決したはずである。学者はどうやら昔から、自分の脳に過大な自信をいだいている生き物であるらしい。

瀬戸内海や有明海にいる天然記念物カブトガニが祖先だという説もある。カニとはいうが、カブトガニはどちらかというクモに近く、化石で有名な三葉虫とも類縁がある。初めて出現したせきつい動物は、かっちゅう魚とって、頭に大きなカブトをかぶり、そのうしろの体は貧弱で、カブトガニや三葉虫に似ていた、といわれればそんな気がしないこともない。そこでまたこれをひっくり返してせきつい動物をつくろうという努力が重ねられた。これもまた、口と脳との位置関係がネックとなって成功しなかった。もっとも、上から見ているからかっちゅう魚に似ているのであって、カブトガニをひっくり返したら足がたくさん生えていて、魚ではなくクモに似ている。

さて、あまりかけはなれたとんでもない動物に先祖を求めるのは無理だとわかって、もっと近いところをさがそうということになった。そして、第1にあげられた候補者が、ナメクジウオなる生き物である。これについてはすでにくわしく説明した(第18号)。と書いてすまそうとして、18号をみたら、「というわけで、ナメクジウオとはこんな生き物である。といっても、これでは何もわからぬと思うが、いずれまたゆっくり説明する予定だから、わからなくともかまわない」と書いてあった。その「ゆっくり説明する」「いずれ」が、どうやらここであるらしい。仕方ないからゆっくり説明することにしよう。ただし、図は18号に出したから、ここでは出さない。バックナンバーをとり出して、図を見ながら読んでいただきたい。勉強だから、それ位の努力はしていただかないと困る。

ナメクジウオは体長5センチ、せいせい7~8センチの透明な生き物で、日本では瀬戸内海や有明海の浅い砂地に住んでいる。くしくもカブトガニといっしょだが、別に関係はない。砂に埋もれ口だけ出して水をすい込み、プランクトンをえらでこし分けて食べている。水族館で飼育したことがあったが、ときどき砂から出てきて泳いでいた。もっとも、体を左右に折りまけて、びんびんと跳ねているといった状態で、とてもすいすい泳ぐというわけにはいかぬ。

ナメクジウオがせきつい動物の先祖と目されたのは、その全体の形と体のつくりである。泳がせてみたらがっかりするが、絵で見ているかぎりこれは魚であって、ミミスでもカタツムリでもない。体の中心を頭から尻尾の先まで、せきついの前身であるせき素が走り、その上、つまり背側に神経系(これはしかもミミスとちがって中空の神経管である)、その下、つまり腹側には消化管が通っている。両者が交差していることもない。せきつい動物の先祖の理想形を画けといわれたら、たいていの学者は、ナメクジウオみたいな絵を画くに違いない。それほどナメクジウオは、せきつい動物の先祖らしいかっふうをしているのである。

このままであれば、せきつい動物の先祖の栄光をナメクジウオが担うことになって、まあナメクジウオの方も別にいやがらないだろうし、我々だってなるほどそうかと思うだけだから、万事めでたく終わったところなのだが、そこはやはり、真理に忠実な学者の世界のこと、またいろいろと難くせをつける人が出てきた。考えてみれば、せきつい動物の先祖がはっきり決まってしまうと、生物学者の飯の種が1つ少なくなるわけである。ここはひとつ、無理にでもケチをつけねばなるまい。第1、せきつい動物が起原して5億年、片や万物の霊長、時には爆発する原子力発電所までつくり、爆発することがわかってはまだ止めようとしないう程賢い人間様まで進化してきたというのに、その先祖が先祖のままでちっとも変わっていないということなど考えられない。そういうつもりで見ると、ナメクジウオにもいろいろとアラが見えてくるのである。私が学生のころに、「動物形態学」なる講義をしてくれた高谷 博 という先生がいて、ついでにいうと、その講義があまりに面白かったからいまだにこんなことを書くことになってしまったのだが、そしてなぜ私が、何の変哲もない形態学の講義を面白いなどと感じたかといえば、私は高校のとき生物なんぞに興味がなく全く勉強していなかったから面白かったのだろうと思っているのだが、その先生がやはりナメクジウオの話をして、「せきつい動物の先祖に頭がなくっちゃねえ」と言われたことを、その口調も含めていまだによく覚えている。頭がないから良いというのか、いけないというのか、それははっきり言われなかったが、その口調からすると、やはり人間につながるせきつい動物の先祖に頭がないのは許せなかったようである。事実、ナメクジウオの背側を走る神経管は、単純な中空の棒であって、その前の端に全くふくらみはない。本によっては少しふくらませて画いた図を載せていることもあるが、いわゆる脳は全くないといってよい。脳だけでなく目も耳も鼻もない。体の中心を走るせき索の両側に、光を感じる細胞は並んでいる。これは、明暗と光のやってくる方向がわかる程度の“目”である。体が透明だから、目はどこにあってもよい。

もっとも、^{ウラ}脳や目や耳や鼻がないということは、先祖ではないという証明にはない。むしろ先祖だからこそそういうものはないのであって、これからつくればよいからである。ないからといって、常にかつてあったものがなくなったというわけではない。かつての金持が貧乏になることもあるが、先祖代々筋金入りの貧乏だってあるからである。退化したというためには、かつてはもっと複雑であったという証拠をさがさねばならぬ。金持の先祖が使った山高帽子が押入れの奥に残っていた、というような証拠である。ナメクジウオの山高帽子は、そのエラの構造であった。

エラというのは、もともとせきつい動物（正確には下等せきつい動物）の大きな特徴の1つであって、口のすぐ後の、消化管の前の方が、両側でさけている部分である。裂け目は1つでなく、たくさんできる。エラというと、水中の酸素をとりこむための呼吸器官であると信じこんでいる人は多いと思うが、そしてまあそれでもいいのだが、本来の起原をたずねると、そうではな

い。これは、もともと餌をとる器官としてできたものである。せきつい動物のはるかな先祖は、水中に浮かんでいるプランクトンやごみを食べていた。ところが、水といっしょにのみこむと、おなかの中がいつもだぶだぶになって気持ち悪い。何かええ工夫はないやろかと思って考え出したのが、エラである。消化管の入口近くの両側に小さな穴をたくさんあける。その奥にせまい部分をつくっておくと、水は穴からぬけていき、餌だけ残るといふしかけである。そのころのまだせきつい動物になっていないせきつい動物の先祖は、体も小さく体表に丈夫な皮膚もかぶっていなかったから、特定の呼吸器官などなくても、酸素のとりこみに不自由はしていなかった。だからエラはまず、餌のこしわけ器官として出発し、のちに、どうせたくさん水を通すのなら、ついでに酸素もいただくことにしようというわけで、呼吸もかねることにしたのである。いまでもエラ骨からクシの歯のように突起をいっぱい生やして、プランクトンをこしわけている魚はたくさんいる。イワシがそうだとはいえだれでも納得するが、世界最大の魚、20メートルに達するジンベイサメもそうだとはいえ、いかに偉大な会長のいうことでも、首をひねる人は多いだろう。でもこれは、正真正銘の事実である。

さて、このエラ穴は、消化管のみならず、その外側の体壁にも穴をあけなければならない。そうしないと、胃袋は水びたしにならないが、体中が水びたしになる。そこで魚は、体表までエラ穴を通し、直接外へ水をはき出している。

ところが、我がナメクジウオは、その水を直接外界へ出さないのである。消化管と体表との間にひとつの空所をつくり、エラ穴から出てきた水を一時そこへためこむ。そして体のはるか後方、といっても消化管の出口である肛門よりは前だが、でまとめて外へ出すのである。このしかけを、エラをとりまいてる構造だから、囲無腔（いさいこう）という。ナメクジウオの生殖巣は、この中に発達する。あらかじめろ過したきれいな水で、卵や精子に“虫”がつかないようにしているのかも知れない。

さて、だれが考えても、魚のエラよりナメクジウオのエラの方が、構造が複雑で特殊化していると思うだろう。つまり、ナメクジウオはかつてはもっと複雑な生き物であったという証拠、つまり山高帽子が見つかったのである。

というように、本にも書いてあるし、ここ10数年間私も講義で学生に教育してきた。ところが、この原稿を書きながら考えていたら、そうでもなさそうな気がしてきたのである。そのことは、次号で書くことにしよう。といっても、いまたくさん原稿があるので、次号はすぐ出ることがはっきりする必要はない。

<< 編集者 へ の 手 紙 >>

(その1)

厳しい寒さの続く今日このごろですが、編集局の皆様、いかがお過ごしでしょうか。<いかがも何も、春休みとともにそこらにおらん —— 会長> 昨年暮れに原稿をお送りしましたが、もうひとつ完成しましたのでお送りします。前回の原稿はマイコンの1.6ドットのプリンターで打ったので読みづらかったと思いますが、今回からは24ドットです。実は、今年はじめにワープロを買ったのです。これからはこのワープロを使って、編集部の皆様に和文タイプの手間をとらせることなく <編集局の皆様は、もともとそんな手間をとったことはないよ —— 会長> どんどん原稿を書き、会長の地位をおびやかそうとたくらんでいます。<それがどうして会長の地位をおびやかすことになるのかね。どんどん原稿が来たら書く手間がはぶけて助かるだけだと思うがな。東大生の割には論理性が欠除してるね>

100円会員特集の原稿の集まり具合はいかがでしょう。はやく出来上ってほしいものです。<原稿待ってたら7~8年かかりそうだね。君、1号分100枚ほど書いてくれんか>

金沢はたいへんな雪だろうとお察しします。風邪など召されたり、転んで怪我をしたり、あるいは屋根から落ちてくる雪の下敷になったり、自動車に溶けかけた雪をかけられてずぶぬれになったり、吹雪で顔に雪を積もらせたり、子供の雪合戦にまきこまれて雪玉をぶつけられたり、雪でみえなくなった排水溝に足を突っ込んだり、・・・そんなことのないようにくれぐれもご注意下さい。<にくたらしい事書いてるから東京に吹雪が吹く。それにしても、8センチで全都マヒとは少々だらしがないね。慣れぬ雪にすべらぬよう、くれぐれもご注意下さい> なによりも皆様のご健康をお祈りいたしております。

1986・2・5 本郷支部長

(その2) 拝啓 先日はバックナンバー20冊もありがとうございました。さっそく会費100円を振込まさせていただきました。しかし教えて一言。20冊分も「ただ」で送っていただいた上に文句を言うのもナンですけど、私は「フリカエが最も安上り」という会則追記を信じて、わざわざ5円玉を調達して、15円をしっかりとって郵便局へ行きましたが、とられた手数料は倍の30円でした。「クオーク」を買われた時の会長殿ではありませんが、局のおじさんに「こまかいのないんですかー」としかられてあやまったのでした。(30円に1万円札を出した) ですからあそこは15円を30円に訂正すべきです。 敬具

<という次第だそうですから、皆さん気を付けて下さい。もっとも、人間は裏切られることによって価値観が変り、人を疑がうようになります。疑がう心は科学の初まりですから、当「学会」にとってまことに有益な“教育”であったと思います —— 会長>

<< 編集後記 >>

◎ 「次の号は100円会員特集号にする」と宣言したのは、もう半年も前のことであった。これは会長が独裁権を振るって勝手に決めたわけではない。100円会員の業屈である第2編集局と相談の上で決定した事項である。彼らは全員賛成し、「書く」ことを約束した。ノットウイズスタンディング（このごろ英語の本のセミを3つ4つやってるから、ついこうなる。にもかかわらずという意味である）彼らはいつまでたっても書かない。そのくせ、学会本部のコーヒーはがぶのみする。会長のいない深夜にしのびこんで、ポットにフィルターにコーヒーまめまで散歩につれていく。「いいかげんに書けよ」「ああ、そんなのかんたんですよ」そのうちに、続々と原稿が集まり出した。ただしすべて外からである。そしてたいてい1000円会員である。かくて今度は独裁権を行使して、100円会員特集は中止することにした。

◎ 何か感違っているのではないかと思うのだが、非常に真面目な学術的論文を送ってくる人が増えてきた。

会長「このままいくと、“学会誌” になってしまうではないか」

2局長「ええやないですか、“学会誌” なんですから」

まあ、たしかにその通りだが、それにしても2局長は無責任な男ではある。

◎ その学術的論文（ウソとちゃうで）は、あまりにも長すぎて本号に載せることはできなかった。次号の巻頭をかざろうと思う。すぐ出す予定だから、大いに期待していただきたい。といっても、期待する奴はいないだろうけど。

◎ ナカソネはいよいよファッショ的になるし、懐しき皇国史観の“国史” 教科書は復活するし、金沢大学教職員組合理学部分会の委員長と書記長は学部長の手先となって運動をつぶしにかかるし、チエルノブイリは爆発するし、学生はよくいうこと聞くし、毎日いらいらしている。全国の会員に指令する。毎日1回、何でもいいから、上役・先生にさからえ。

?!? 会 計 報 告 ?!?

1985年4月 ~ 1986年3月

収 入

1000円会員	36人	3600円
1000円会員	96人	96000円
2000円会員	12人	24000円
寄 付	2件	170円
小 計		123770円
前年度くりこし		74500円
前年度決算間違い [※]		10000円
総 計		208270円

支 出

上質紙	16000枚×2円	32000円
表 紙	1000枚×3円	3000円
ファクス原紙	88枚×70円	6160円
印刷インキ	3本×900円	2700円
送 料	20・21号その他	65000円
封 筒	500枚×3円	1500円
計		110360円

差 引 次年度くりこし 97910円

※ 前年度会計報告中、支出の項で、「上質紙 9000枚×2円 28000円」とあったのを、こともあろうに合計監査夢籍忍太郎氏が見逃していた。かくのごとき夢籍忍、ではなかった無責任はとうてい許し難く、会計監査を更迭することにした。<会 長>

<監査報告>

計算器が手許になくて確かめられなかったが、おおむね良好と認む。

日本生物学会会計監査 夢籍 忍次郎 印

「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくろうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、“生物”には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、“日本”生物学会であるので、日本語以外は受けつけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。（聞きたいものがいなくても同様である）二次会はさまたげない。

会員の資格は“非教授”とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年1000円、定職なきもの年100円とする。善意の寄付はこれをこぼさない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の“管理・運営”は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1 金沢大学理学部生物学教室 生態学第一研究室 におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は（あまりいるとは思わないが）、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送られたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

1977年5月26日の佳き日に

会長 奥野良之助

< 会 則 追 記 >

教授もしくはこれと同等の社会的地位にある者で、どうしても入会を希望するものは、“不名誉会員”とし、会費2000円を徴収する。

学部長、学長もしくはこれに同等な社会的地位を有する者で、どうしても入会したい人は、“特別不名誉会員”とし、会費4000円を徴収する。

現普通会員も、出世したときは、これらに準ずる。

会費の送金は、郵便局の下記振替口座を利用するのが、最も安上り（1回15円）である。もちろん切手でもよく、100円を書留にして350円かけて送ってもらっても、当方は一向に差支えない。

金沢 40763 日本生物学会

日 本 生 物 学 会 誌 投 稿 規 定

- 1 日本語に限る。
- 2 漢字はなるべく当用漢字に限ること。タイプの括字がない時は、勝手にカナにかえることがある。
- 3 原稿の長さの制限はしない。ただし、1号は100枚（400字づめ）しかはいらないので、適宜分割掲載することがある。
- 4 形式・内容とも、全く自由とする。読む・読まないは読者の自由であるから、読者のことなど考えずに書けばよい。
- 5 匿名、変名、ペンネーム、いずれも可。もちろん本名でもよい。
- 6 いずれの場合も、肩書、所属などは不要。
- 7 寄稿者には本誌5部を進呈する。別刷のほしい方は、原稿にその旨誌しておくこと。
- 8 図、写真も可。ただし写真はおそらく、何が何かわからなくなるものになる。

1982年8月 改訂

(1977年7月の第1号35ページ

記載の投稿規定は、廃棄処分とする)

日本生物学会誌 第22号 1986年6月30日

編集・発行

日本生物学会

金沢市丸の内1の1

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者

奥野良之助

許可無断転載